
学園都市虹ヶ丘

アケザキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園都市虹ヶ丘

【Nコード】

N59880

【作者名】

アケザキ

【あらすじ】

日本の何処かにあるらしい、巨大な学園都市 - 虹ヶ丘 -
そこでは色んな人達が、色んな騒動を起こす。
何でも有りな学園の日常・・・。

(更新は遅くなると思います。)

2011年1月23日、『質問コーナー』を開始します！『感想を送る』の欄から質問を送ってください！よろしくお願いします！！

・「こんにちは。」「初めに。」「挨拶、舞台設定等・・・」
・（前書き）

初めまして、アケザキです。

初心者なので、基本グダグダ話になると思います。

ご了承ください。

・「こんにちは。」初めに。ご挨拶、舞台設定等・・・

虹ヶ丘

日本の何処かにあるという学園都市の一つ。

広大な面積の中には学園の施設の他に、ショッピングモール、映画館、警察、病等のあらゆる建物がある。

また日本だけに留まらず、世界中の企業の支部が虹ヶ丘に集まってきている。

更に、虹ヶ丘は日本の政府がそう簡単に手出しが出来ない。（その理由は本編で）

学校法人虹ヶ丘

虹ヶ丘学園を運営している学校法人。

組織のでかさは日本一。

系列の学校数は25校にのぼる。

虹ヶ丘学園

虹ヶ丘の中にある大きな学園。

初等部から大学、大学院まである。

学科は普通科、音楽科、美術科、魔法学科、特別国際科、の五つ。
（それぞれ校舎が別れている。）

制服はブレザータイプのもので統一されている。

尚、普通科はコースが3つに別れている。

普通科 進学進路スタンダードコース

普通科3コースの内の一つ。

主に、基礎学力をつけるための勉強を中心としたコース。

大半の普通科の生徒はこのコースに入っている。

普通科 進学進路アドバンスコース

通称、特進コース。

中等部の特進から高等部の特進までは、基礎プラス応用問題中心の学習になる。

試召戦争システムを採用していて、実際の試召戦争は、高等部二年生から始まる。

ちなみにこのコース、やる気が有ればどんな馬鹿でも入れられるらしい。
・・・

(このコースに関しては、学費がかなり安い事も特徴。)

特別国際科

校舎自体は存在しているが、生徒自体を見る事が全く無く、進学者の募集を行っていない。まさに存在自体が異質な学科となっている。ある秘密があり、その秘密を知るものはほとんどいない。

虹ヶ丘学園風紀委員会

最強で最凶の委員会と呼ばれている、虹ヶ丘学園の風紀委員会。

・「こんにちは。」「初めに。」「挨拶、舞台設定等・・・」（後書き）

このページは、主に舞台設定等を載せていこうと思います。

頑張って執筆しますので、よろしくお願いいたします。

最後になりますが、この小説の基本的な舞台は普通科の校舎になります。

色々と拙い文章で申し訳ありませんが、応援よろしくお願い申し上げます。

2010年11月23日改編。

オリ主紹介（現在5名）「張り切って行くぞ！」（前書き）

オリ主達の紹介です。

オリ主達は7人出す予定。

今のところ、二人分しか作れてないので新しいオリ主が出て来たら更新します。（11月に一人&12月に二人分追加しました。）

オリ主紹介（現在5名）「張り切って行くぞ！」

オリ主1

名前 サファイア・トゥールヴィオン

性別 女

年齢 13歳

誕生日 9月16日

性格 気まぐれ、男まさり、負けず嫌い、時々ドS。

使用武器 バニシング・ロッド

（チアのバトンを2m位に伸ばし、両端の部分を少し大きくした物。科学と魔法と偶然の産物で、機械仕掛けのギミック満載。サファイアが命名）

好きな食べ物 クレープ、カレー、ホットケーキ

嫌いな食べ物 本人曰く、ない

四人姉弟の次女。

喧嘩が物凄んごい強い。

不思議な雰囲気をかもしだしている。

一人称は俺 or 俺様。

喧嘩の師匠がいる。

運動神経がいい。

男女問わず人気がある。と言うより、女子に異常にモテる。

最近の悩みは、女子から貰う手紙が全部ラブレターだったこと。

読者に一言

これからよろしくな!!

オリ主2

名前 関根 海人
せきね かいと

性別 男

年齢 13歳

誕生日 8月12日

性格 大人しい、控えめ、粘り強い。

使用武器 ????

好きな食べ物 白米、シヤケ弁、秋刀魚の塩焼き
嫌いな食べ物 しめじ

一人っ子。

かなり苦勞人。

ツッコミ担当。

軽い不幸體質。

サファイアに淡い恋心を抱いている（無自覚）。

キレると怖いよ。

あだ名は忠犬チワワ（サファイアが命名。理由は話の中であかす）。
女装をすると、凄く可愛い。

色んな事に巻き込まれているためか、へこたれない心の強さがある。

読者に一言

よろしくね。

オリ主3

名前 黒崎 純
くろさき じゅん

性別 男

年齢 13歳

誕生日 6月14日

性格 おっとり、マイペース、天然

使用武器 中華刀“暗黒龍”（普段は、鉄扇の“黒龍”）

好きな食べ物 おにぎり、たくあん、すき焼き
嫌いな食べ物 特に無い

一人っ子。

趣味はスケッチ。

フルートもやっている。

自然が大好き。

天然さんなので、ポケ方も凄い。

武器は祖父から譲り受けたもの。

サファイア（オリ主1）とは幼なじみ。というか、家が隣どうし。

ちよっぴり黒属性。

可愛い系。女装をすると完璧な女子に見える。

読者に一言

とりあえずよろしくね！

オリ主4

名前 たきした 滝下 かなえ 香苗

性別 女

年齢 14歳

誕生日 11月10日

性格 気が強い、真面目、若干ツンデレ気味
使用武器 忍者刀“小紅”、鎖鎌“翠”その他の忍者道具

好きな食べ物 お味噌汁、ハヤシライス、林檎
嫌いな食べ物 特になし（既に克服）

一人っ子。

しっかり者で頼りになる、『自称』クールでカッコイイお姉さん。
（でもツンデレが発動するとキャラ崩壊・・・ってかツンデレそのもの）

ツッコミ担当なので苦労しているところもある。

趣味はサックス演奏。

料理も得意。

好きな花は向日葵。

アーウィンとは恋人同士。

家は代々続く忍の家系（女系一族らしい）。

読者に一言。一応、よろしくね。

オリ主5

名前 アーウィン・キアス・ペトルーシユカ

性別 男

年齢 15歳

誕生日 12月25日

性格 冷静、真面目、若干シャイ、S属性。

使用武器 ハーツ・クロス（普段は十字架の飾りなのだが、発動すると鎌や槍などになる。）

好きな食べ物 ビーフシチュー、肉じゃが、香苗が作ったもの全般。
嫌いな食べ物 無い。

一人っ子。

テライケメン。

膨大な魔力を持っている。

色々とチート過ぎる人。

虹ヶ丘の都市伝説、『死神道化』の顔を持つ。

現在、一人暮らし。

香苗とは恋人同士。

あだ名はウイン。フウと呼ばれる事もある。

ボケ属性。

趣味はサックス演奏。

ジャズ大好き。

読者に一言

・・・よろしく。

オリ主紹介（現在5名）「張り切って行くぞ！」（後書き）

いかがだったでしょうか？

未熟者ですが、読んで頂ければとても嬉しいです。

明日あたりに第一話を更新しますので、よろしくお願いします！！

第一話「おはようございます。」始業式。中高等部校舎の校門前で。(前書き)

第一話です。

よろしくお願ひします…!

どござん、(、)

第一話「おはようございます。」始業式。中高等部校舎の校門前で。

（四月 虹ヶ丘学園始業式）

桜が咲き乱れる季節がやってきた。

小鳥がさえずり、そよ風が吹いて花びらが踊る。

美しい花吹雪の舞う並木道を女の子が一人歩いていた。

？」「うん 今日から学校だなあ〜っ。 桜も綺麗だし、こんな日はゆっくりと花見でもして過ごしたいぜえ ……」

この少女の名前は“サファイア・トゥールヴィオン”虹ヶ丘学園中等部に在籍している。

かなり美人で凄く可愛い顔をしているが、口調は悪く、一人称は俺である。

また喧嘩ももの凄く強く、実力はその辺のヤンキー集団を簡単にひねりしてしまうほど。

ちなみに、滅多に使わないが武器もある。

(詳しくは登場人物の欄をチェックしてください。)

まあそれはさておき、サファイアは学園の校門の前に辿りつく。

校門の前には、いかにも気怠そうな白髪天然パーマの男がいた。

？「オーイ作者。いくら俺が死んだ魚のような目えしているからって、そりゃねえだろ。」

本当の事だろうが。

？「まったく、今銀さんは糖分足りなくてイライラしている所なのに、余計イライラしちゃったじゃねーか。どうすんだコレ。」

五月蠅え万年天パー男。どーせそのテンパーは一生賭けても治らないんだからな。

？「んだとゴラア！！！！おい作者！！てめえだつて天パーのくせに！！中学ん時ストパーかけたけど、結局元に戻ったじゃねーか！！！！！！」

さて、（「おい！？無視かあああああ！！！！！！！！！！」）
この白髪天パー男の名前は“坂田銀八” 国語教師である。

国語教師なのに、何故か白衣をいつも着ている。
もちろん甘党。

みんなが知っている、我等が銀ぱっつあんだ。

つーかあんたの場合美容師に諦められているだろうが。見捨てられてるだろうが。後で覚えておけよ天パー（黒笑）

サ「おはようございます。そして朝っぱらから作者と喧嘩さないでください。五月蠅いですよ。てん 銀八先生。」

銀「俺だって朝っぱらから喧嘩したくねーよ。早く糖分補給したいんだよ。それとお前、今さっき俺の事“天パー”って言いかけたよな。」

サ「気にしたら負けです先生。絶対気のせいですよ。それにしても、いい具合に目が死んだ魚みたいになってますねー今日も。しかも見事なまでに。」

銀「おいもうそれ褒めてねーだろ！！けなしに入っているだろ！！わざとか？今のわざとか？」

ニコニコしながら傷口に塩を塗る様な事を言うサファイアにツッコむ銀八。

サ「わざとじゃないですよ。俺は本気で言っただけです。」

銀「余計タチ悪すぎるわ!!!!!!」

サ「んな事どうでもいいんで、さっさと中に入れてください。こんな所で時間喰いたくねーし。」

銀「お前なあ、いくらマイペースでもほどがあるだろうが。」

銀八先生は呆れながら言う。

銀「それにオメエは今日から厨二病真っ只中の中二になるんだぞ。中一の段階でも結構問題ばっかり起こしやがって もうちょっとしっかりしろよ。オイ。」

サ「万年厨二病で俺よか問題起こしてる先生に言われたくねーよ。」

痛いところをツッコんできたな。

銀「 まあともかくアレだ。後輩も入ってくる頃なんだし真面目に頑張れや。(サファイア、後でツラ貸せ。職員室に。)」

サ「程々に頑張ります。(嫌です。つーか無理)」

何か言っている事と目で会話している事が全然一致してないんだけど
まあ、いいか。

二人

「イヤ、いいわけねえだろーがああああああああ!!!!!!
!!!!!!」

さて、そんな虚しすぎる会話もアレなのでそろそろ話を進めたいと思う。

銀「 んでもってサファ。新学期、特に新級になるが一番大事なイベントがある。何だか分かるか？」

サ「 “クラス替え” ですか？」

サファイアは嫌な顔をしながら返答する。

銀「そう、「クラス替え」だ。このイベントによってテンションが上がったり、もしくは下がったりする奴らが出てくる。」

サ「あー、自分の組の名簿見た時に友達が少なかったりすると妙に寂しくなってしまうヤツっすよね。」

銀「そうだ。もっと運が悪い奴なんかはな、知り合いも友達も皆他のクラスに行っちまって、逆に仲の悪い奴らなんかと一緒にになってしまつて、この世の地獄に投げ出された様な感覚に陥ってしまう。あの“クラス替え”だ。」

サ「その微妙にリアルな表現やめてくれませんか。」

「ブッ。」

銀八はサファイアにひとつの封書を差し出す。

サ「何ですかその封書。携帯の料金請求書ですか？オイオイ勘弁してくれよー。」

銀「今まで何聞いてたんだお前は。この中にお前の運がすべて

詰まっている。」

どうやら、“クラス替え”発表の紙が入っているらしい。

「サ「何で封書なんだよ。一枚の名簿の紙じゃないんですか？普通は。」

銀「あー、実は今年から中等部と高等部のクラス替えは全員封書で
通達することになったんだ。前々から中高の特進の奴らから『他の
コースの人達ばかりずるい』と言う苦情があったそうだった。」

サ「まじっすか。」

銀「ホラ。とりあえず受け取れ。」

カサツ。

サファイアは封書を受け取った。

銀「さあ、新しいクラスと言う名の冒険に旅立ってこい。」

サ「RPGゲームの冒頭に出てくる台詞っぽい事言つのやめてください。」

銀「あ。後一つ言っとく。集合場所h」サ「体育館ですよ。知ってます。」
『・・・分かってってんなら行ってこい。』

そして、サファイアは校門をくぐって校舎内に入って行った。

第一話「おはようございます。」始業式。中高等部校舎の校門前で。(後書き

何とか書き終えました。

疲れました……。

携帯と格闘すること4時間……。

これからよろしく願います!!

ご意見、ご感想、御指摘等がございましたらドンドン書いて下さい。

また次話でお会いしましょう。

2011年2月15日、編集&一部改編いたしました。

第一・五話「ギヤアアア！」始業式。その後の銀八先生。（前書き）

前回の付け足しみたいな物です。

一応、話は続きます。

第一・五話「ギヤアアア！」始業式。その後の銀八先生。

うららかな春の空の下。

進級と言う言葉に、一人の男子生徒、“関根海人”の心の中は希望であふれていた。

この時までには。

~~~~~

- 校門前 -

そこには、前回の話でも出て来た坂田銀八先生がいた。

海「おはようございます。坂田先生。」

海人は銀八に挨拶をした。

銀「あーお前か。パツとしない地味キャラの一人、関根海人。」

海「先生、朝からきつい毒舌をありがとうございます。でも、そういう事は今言わないで下さい。傷つきますので。」

銀八がボケても、落ち着いて対処する海人。

銀「相変わらず真面目だなあ、オイ。ウチのどこぞの変なアイドルオタクの地味のダメガネ（新八）にその生爪煎じて飲ませたいわ。全く、あのアイドルの何処がいいのやら。」

さらりとボケながら教え子“志村新八”をけなしている銀八。

海「褒め言葉として受け取っておきます。後、生爪じゃなくて爪の

垢です。生爪煎じるなんて、先生は鬼ですか？それともただのドSな魔王か何かですか？もうひとつ、新八先輩の扱い方が面白いそうです。今すぐ直した方がよろしいかと思えますよ。それと、その事を新八先輩に言わない方がいいですよ。他に何かありますか？」

今度は一つのポケに対して千のツッコミを繰り出す海人。  
これぐらいの事は手慣れている様子だ。

銀「 いや、無いけどさ お前よくニコニコしながらこんな長いツッコミ言えるよな 。何か俺に恨みでもあるの？」

海「ありませんよ。」

銀「 そうなの 」。 」

銀八は、これ以上ポケても仕方がないと悟ったようだ。

海「それより銀八先生、早くクラス替えの紙を下さい。」

銀「ほい、これ。」

サファイアの時と同じ様に、銀八は封書を渡す。

海「この中に入っているんですね。わかりました。」

海人は封書を受け取った。

海「ありがとうございます。じゃあ、頑張ってくださいね。」

銀「え？何を??？」

海人の言葉に首を傾げる銀八。

海「決まっているじゃないですか。ホラ、俺の後ろにいる。」

銀「後ろにいる??？」

海人の後ろ、そこには。

海「新八先輩の相手です。それでは、俺はこれで。」

新「せ〜ん〜せ〜い〜  
ゴ )」 (シユユユユユユユユ)

そこにはとてつもなくドス黒いオーラを放ちつづける、志村新



八ご本人がいた。

銀「し 新八君？

い 何時からいたの

?????

新「先生が最初にボケた時からですよ

!!」

新八は、キレていた。

銀「オイ、ちよつと待ってくれせき」  
「っっていない!??って待て  
!待ってくれ!?!?!謝るから!?!謝りますからあ!?!?!?!?!」

新「僕の事をけなす分にはいいんですよ

だけどなあ!?!?!!

！」

ズン、ズンと新八が銀八に迫ってくる。

銀八は恐怖で足がすくみ、動けない。

銀「は・・話せばっ！！！！！！話せば分かる！！！！！！！！話せば分かるからあ！！！！！！！！」

新「お通ちゃんを　！！！！！！お通ちゃんを馬鹿にするんじゃない  
え！！！！！！！！！！」

その形相は、まるで般若そのものだった。



- 校庭 -

海「あー、怖かった。まさか新八先輩が後ろにいて、その上キレるなんて予想外だったからなあ。坂田先生、大丈夫かなあ？」

あのと、海人君は新八先輩の鉄槌に巻き込まれたくない一心で一目散に走ったのだ。

ちなみに、銀八は新八に星にされた。

海「俺、何処のクラスになったんだろ？」

さっき、銀八から貰った封書を開ける海人。

そこには、一枚の紙が入っていた。

海「え〜っと、俺のクラスは」

紙にはこう書かれていた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

関根海人

二年A組 出席番号15番

担任教師 黒鋼（担当教科：保健体育）

.....

海「（二年A組 担任は黒鋼先生

凄そうだなあ。

でも

大丈夫だよね！きつと！！」

海人はまだ知らない。

この時からすでに、運命の歯車が廻りだしていた事を……



第一・五話「ギャアアア!!!」始業式。その後の銀八先生。(後書き)

いかがでしたか？

ここで次回の予告。

始業式を終え、「ってちよつと待って!!」何だい？海人君。

海「この話の段階で、まだ始業式のしの字もでてない」さて次回は

(海「俺無視いいいいいい!!!!!!!!!」)

第二話「始業式。自己紹介、二年A組教室にて。」(仮)

張り切って行くぞー!!

2011年2月16日。編集&一部改編をいたしました。



**第二話「ヴェニヤ」。「始業式。花粉症には」注意を。(前書き)**

長らくお待たせ致しましてすみません！

第二話、発進しますよ〜。

スタートっ！！

## 第二話「ヴェニャー」。「始業式。花粉症には」注意を。

- 体育館 -

そこでは、さっきまで中等部及び高等部の始業式が行われていた。現在、この体育館の中に残っている人数は零。簡潔に言うといないのだ。

……もっと正確に言うと、人間は誰も居ない状態だと言う事。

代わりにいるのは……

「ヴェニャーっ。」

……“くるん”のついた一匹の猫だけ。

~~~~~

・二年A組教室・

？「ではこれから、一人ずつ自己紹介をしてもらう。」

始業式が終わった後、先生の指示の下で生徒達は新しいクラスに移動した。

今の時間はHRとして、各クラスそれぞれが自己紹介等を行っている。

もちろんこの二年A組も例外では無い。

そして今、この教室を仕切っているのは担任の黒鋼^{くろがね}先生。担当教科は保健体育。また、運動部の総括顧問も担当している。

黒「俺が順番に出席番号を言っていくから、呼ばれた奴はその場に立って自己紹介をしろ。……まず、出席番号1番。」

1番「はい。」

〜海人Side〜

…遂に自己紹介が始まった。

…にしても、まさかアイツと同じクラスになるとは思わなかったなあ……………。

ハア……………また何かトラブル起こさないといいけど……………。

〜海人Side終了〜

……………海人が言っているアイツとは誰の事か？

それは……

「へくちヨツ!!」

……サファイア・トゥールヴィオンの事である。

サ「フィックチュツ!!」

黒「…おい、トゥールヴィオン。風邪でもひいたか？」

サ「いや…風邪じゃないと思うんすけど…ファックチュン!ハックチュツ!!」

黒「…まあい。次、出席番号5番。」

…まあそのうちくしゃみは止まるだろうと思ひ、再び出席番号を読み上げた黒鋼先生。

サ「ファックシュ!!…ハックシュン!!…ブエックシュツ!!
…うっ~~~~っ」

…しかし、サファイアのくしゃみは中々止まらない。

黒「……おい、ホントに大丈夫か？」

サ「……大丈夫ですよっ……ブエクシッ!！」

黒「って言ってるそばからくしゃみしてんじゃねーかっ!！」

サ「はうっ……」

ゴソゴソとサファイアは制服のポケットからティッシュを取り出す
が……

サ「……先生。」

黒「あ?何だ?」

サ「……ティッシュ持つてる?」

黒「……は?」

黒鋼先生はサファイアの方を見る。

サ「スツカラカン……………」

…そこには空になったポケットティッシュのビニールを持ちながら、
涙目になっているサファイアがいた。

黒「俺から借りようとすんな!!」

サ「だってこういう時こそ先生の役目じゃん…………ハツクチュン!!
…それに鼻がむずむず、目も痒い…………ブエックシヨイツ!!」

黒「教師を何だと思ってるんだ!!っーかそれ花粉症の症状じゃね
ーか!!とりあえず周りの奴から借りろ!!」

サ「…………じゃあ沢田。ティッシュ持ってっか?」

サファイアは後ろの席にいる男子生徒、
沢田綱吉さわだつなよしに声をかける。

ツ「ええっ！？お、俺！？」

サ「わりい。んで…ティッシュ持ってる？持ってるなら大至急出して……………」

ツ「ち、ちょっと待ってて……………」

えーと、確かここに…と言いながら鞆の中を探すツナ。

？「サファイアちゃん。」

サ「……………ん？京子ちゃん……………？」

その時、サファイアの前の席にいる女子生徒、みさながわきよつこ笹川京子が声をかけた。

京「はい、これあげる。」

その手には、一つのポケットティッシュがあった。

サ「あ、ありがとう……!!」

サファイアは京子から、ポケットティッシュを受けとった。

ツ「…ゴメン京子ちゃん、迷惑かけちゃって……」

京「ううん、いいの。花粉症って凄く辛いよね。サファイアちゃんの気持ち、よく分かるもん。」

サ「ううっ…このことは恩に着るよ、京子ちゃん……!!」

涙をダァッと流しながら、お礼を言うサファイア。

サ「あと、ツナ缶もありがとう!!俺、今度からティッシュ切らさないように気をつけっから!!」

サファイアがそう言った時だった。

?「トウルヴィオン!!今テメエ、また10代目の事『ツナ缶』とか言ったる!!…ちゃんと『綱吉さん』とお呼びしやがれ!!」

サ「…ああ？どう呼ぼうと俺の勝手だろが、獄寺。」

サファイアにも申した男子生徒、獄寺隼人つくひらはやしは更にキレ気味に言う。

獄「何言つてやがる！！…この方は将来ボンゴレを継ぐ凄いお方なんだ！！テメエみてえな奴なんか、そう簡単に呼ばせられっか！！！」

…どうやら、先程の『ツナ缶』発言が気にいらなかったらしい。

ツ「ま、待って獄寺君！！呼び方でそんなにエキサイトしなくても…」

獄「何言ってるんですか10代目！！…コイツは事あるごとに10代目の事を侮辱してるんですよ！！！」

獄寺は、ビシィッ！！とサファイアの方を人差し指で差す。

サ「ハア！？何だよそれ！！言い掛かりも大概にしやがれ！！！」

獄寺の言葉に、サファイアはカチンときた。

獄「言い掛かりじゃねーよ！！そもそも、テメエは中一の時から10代目に対して何度も何度も『ツナ缶』呼ばわりしやがって！！」

サ「アレは単なるお茶目とお遊びで呼んでるだけだ！！いーじゃねーかちよつと位！！」

∴ どんどんヒートアップしていく二人。

海「ちよつと、二人とも落ち着いて！！進級早々に喧嘩するなよ！！」

さすがにこれ以上はヤバいと思い、海人が止めに入る。

サ「うるっせー忠犬チワワ！！すっこんでろ！！！」

海「忠犬チワワって言うな！！！！っていいから深呼吸して、落ち着いて！！！」

？「関根の言う通りだって。まずは落ち着いて、ゆっくりと話そうぜ。」

そこに、野球部員の山本武^{やまもとたけし}も合流していく。

獄「野球バカもだまつてる!!」

サ「山本!手えだすな!!これは俺と獄寺の問題だ!!」

しかし止めに入るものの、更に白熱してきた二人。
…このままじゃ殴りあいになりそうな勢いだ。

だがその時。

ブチッ!!

……何かキレる音がした。

……その音がした方向には……

冒頭の猫の話に戻る。

「ヴェニヤ」

さっきまで体育館にいた一匹の猫。
今は外にある林の中で、散歩を楽しんでいる。

「ニヤ……………」

そこに、ひらひらと綺麗な蝶々が一匹、飛んできた。

「ヴェニヤ〜！」

…どつやら、蝶々を気に入ったらしい。

「ヴェニヤ〜っ」

蝶々が飛んでいく方向を猫が追いかける。

その後のことだった。

「ヴェニヤ〜……」

…見失ったらしい。

キョロキョロと辺りを探す猫。

「ニヤア〜！」

その飼い主みたいな人物が猫を探していた。

続く

第二話「ウエニヤ」。「始業式。花粉症にはご注意を。」（後書き）

予想以上に長くなってしまいました・・・。

誤字、脱字等がありましたらお知らせください。

また、感想や御指摘がありましたら書いてください！

今回は第三のオリ主、純ちゃんの登場&猫が起こす大騒動です

それでは

2011年3月15日。小説を改編&一部分を修正致しました。

第三話「？あの噂？」「始業式。林の中の……。」「前書き」

お待たせ致しました。

第三話発進します！！

第三話「？あの噂？」「始業式。林の中の……。」

キーンコーンカーンコーン

二年D組

？「ふああ〜っ。放課後だあ〜。」

∴ 帰りのHRも終わり、教室にいる生徒達はぽつりぽつりと帰り始める。

この二年D組も例外では無い。

そして、さっきの呑気な声の主は“黒崎純”。二年D組の生徒である。

純「さて、そろそろサファちゃん達と一緒にかーえろっと。」

・二年A組・

ガラッ！

純「お邪魔します。サファちゃん達いるー？」

純の呑気な声が、教室内に響く。

海「あー、純か…どうしたの？」

そこへ、海人がやって来る。

純「海人、一緒に帰ろー…っつてアレ？サファちゃんは？」

海「……サファならLHRの時に、黒鋼先生を怒らせて獄寺君と一緒に職員室に連れて行かれたよ…ハァー……………」

純「（……また何かトラブルを起こしたんだ……）」

海人の言葉と疲れきった表情から、純はその時の状況を察した。

純「……迎えに行く？」

海「……行くつか。俺、沢田君達を呼んでくるよ。」

~~~~~

「ヴェニヤーツ！ヴェニヤーツ！」

…前回の冒頭と最後に出てきた、“くるん”のついた猫。蝶々を追いかけていたら地面の窪みに落ちてしまった（詳しくは前回で）。

怪我はしていないが、自力では脱出出来ない深さのため動けなくなってしまった。



鳴いて助けを求めるが、此処は薄暗い林の中。そう簡単に通る人はいない。

「ヴェニヤアー……………」

更にこの林には、？ある噂？があった……

~~~~~

- 廊下 -

獄「すみません10代目…10代目に心配をおかけさせてしまい、俺なんかのために迎えにも来させてしまいました……俺、右腕失格です……………」

ツ「いいんだよ獄寺君。だから、そんなに落ち込まないで。」

サ「ホント最悪……………」

海「まあ、そう言わず……………」

…純達はツナと山本と一緒に、トラブル起こして職員室にいる二人を迎えに行き、皆で帰ることにした。

だが迎えに来たとたん、獄寺はツナに申し訳なかったと激しく落ち込み、サファイアはとてもイライラしていた。

（ちなみに今は歩きながら会話している。）

サ「全く、黒鋼先生マジ最悪……！元はと言えば獄寺が仕掛けてきたのが悪いーのに……！！！」

獄「ああ！？テメエが10代目に失礼な事を言ったのがそもそもの原因だろうが……！！！」

カーンッ！！と戦いのゴングが鳴り、再び火花をぶつける二人。

ツ「ひいひいひい……！落ち着いて、落ち着いて……！！！」

海「二人とも……！ここでトラブル起こしたらまた先生に大目玉食らうよ……！！！」

すかさず止めに入る海人とツナ。

山「でもよ、 “喧嘩する程仲がいい” って言うよな。」

純「じゃあ二人は、とっても仲良しさんなんだね。良かったあ。」

獄・サ「仲よくねーよ!!!!!!!!!!」

… ナイスツツコミ。

サ「ハア… ったく、今日はホントに散々な目にあっただぜ。 …… 朝っぱらから銀八に捕まるわ、変な鳴き声を聞くわ、もう本当に最悪。テンションだだ下がりだっつーの。」

ご機嫌斜めなサファイアから、愚痴がこぼれる。

純「サファちゃん、そんな事無いよ。 …… たとえ最悪な事がいっぱいあっても、世界はとも広いんだよ。宇宙はもっと広いんだよ。そして、未来は無限大なんだよ。 …… だから大丈夫。そのうちテンションも上がるよ。」

海「……純、不思議ちゃん系斜め45度にぶっ飛んだフォローを言
つてどうすんの。」

…本当に斜め45度に行き過ぎである。

- 昇降口 -

山「そーいやさ、変な鳴き声聞いたって言ったよな。」

山本はさっきのサファイアの言葉を思いだし、尋ねる。

サ「ああ。もしかしたら、？あの噂？のかもしんねー。」

獄「!?!?……?あの噂?の奴か!?!!(クツ…先を越された!?!)」

ツ「ええっ!?!ホントにいたのー!?!」

海「?あの噂?つて……何?」

海人は、話している内容がよく飲み込めていない様だ。

サ「アレ、しらねーの?? 特別国際科との境にある林の中には化け物がいるって言う噂。」

~~~~~

「ヴェニヤア……………」

…あれから何時間かたち、猫は体力に限界がきていた。

いくら四月とは言え、まだ冷たい風が吹いている。加えて薄暗い林の中にいるため、体感温度はますます寒いのだ。

「ヴェニヤ……………」

諦めかけたその時、奇跡は起きた。

？「ニヤンコ〜！…何処行ったの〜！！」

飼い主らしき人が捜しに来てくれたのだ。

「ヴェニヤっ!! ヴェニヤっ!!」

猫は必死になって鳴く。

? 「ニャンコ〜!!」

…遂に、飼い主らしき人と再開した。

? 「ヴェ!!? 何この窪みっ!! 待ってて、今助けるからね。……よっ!! いしょ。」

「ニヤっ!! ヴェニヤ〜!!」

そして、救出された。

「ニヤ〜っ。ヴェニヤ〜っ。」

？「ヴェー。大丈夫？よかつた。」

……見た感じ、かなり似ている猫と飼い主。

だが、その後ろに巨大な影が……。

~~~~~

- 校庭 -

海「えっ！？化け物がいるの？」

海人はマジで！？という顔をした。

サ「そう、化け物。いるんだってさ。」

獄「俺はUMAだと思ってるんだがな。」

海「……何かの間違いじゃないの？ほらよくあるでしょ、影がそう言う風に見えるーとか。」

信じがたいなあ……と思う海人。

純「ところが、そうじゃ無いらしいんだよ。これが。」

海「ど……ど……どういふ事？」

純「今年の二月辺りからかな？生物研究部の生徒達がね、昆虫観察
である林に入って行ったんだけど、その何人かが見たんだった……」

海「な……何を……？」

純が怪しい雰囲気をつぶり出しながらこう言った。

純「巨大な白い化け物が、目の前を横切る姿をね……………」

……………

ズシン……………ズシン……………ズシン……………。

巨大な影がどんどん近づいてくる。

？「…ヴェ？何の音だろ？」

……ズシン……ズシン……ズシン……！

？「ヴエッ！……どどどどどじしよじ……俺、煮ても焼いても美味しくないよう……！」

涙目になりながら、言う飼い主。

ズシン……ズシン……ズシン……！

？」「ゴィッ……？」

……音が止んだ。

だが、飼い主の背後には謎の気配が……

「……っ！！！！？」

ガクガクと震えながら後ろを振り返る飼い主。

その後ろには……

……化け物がいた。

おまけ。

海「ところでさ、サファ。」

サ「あ？何？」

海「その鳴き声って、どんな感じだったの？」

海人はサファイアに尋ねる。

サ「いや〜ヤバいってマジ。体育館に向かっている時だったかな……何かの叫び声みたいな感じで、『グギヤアアアアアアアツ！……！！！！』っていうのが聞こえた。……そういや、何かどっかで聞いた様な声だったな……」

海「（……………それってもしかしたら……………）」

海人は冷や汗がたらたらと出る。

サ「……………？どうしたんだ、海人。」

海「あ、いや。ちょっと……………アハハ……………。」

海人は力無く笑うが、心の中でこう思った。

……それ絶対、銀八先生だ……。

第三話」？あの噂？。「始業式。林の中の……。 (後書き)

長くなりそうだったので、第四話に続きます。

ご感想、お待ちしております。

2011年3月16日。小説の内容を編集&一部改編致しました。

第四話「な…なんでこんなところだ!?!」始業式。化け物の正体。(前書き)

今回、ついに化け物の正体が明らかに!?!?

第四話、いきまーす!!

第四話「な…なんでこんなところだ!?!」始業式。化け物の正体。

- 校庭 -

海人は前回の話で聞いた噂について、考え事をしていた。

海「（しかし、ホントなのかなあ…化け物があるって言う噂……）」

海人は、さっき純から聞いた噂の続きを思い出す。

～回想中～

海「巨大な白い化け物が横切った？」

マジで？という表情をする海人。

純「そう、巨大な白い化け物。」

海「……そんな事無いって。」

いくらこの学園が非現実的な事やものが多い（現に魔法学科がある位、色々と非現実的な事も多々ある。）からって、さすがに信じられないと思う海人。

獄「そんな事って言うんじゃない！現に何人が目撃してんだよ！」

海「わ…分かったから、落ち着いて。……他にも特徴とか無いの？」

純「あるよ他にも。えーと、確か遠くから見た子がいてね……」

～回想終了～

海「（でもあんな特徴の化け物なんか、存在してんのかなあ……）」

やっぱり信じられないなあと思う海人。

サ「…海人、どうした？腹でも壊したか？」

黙々と考え込む海人に、サファイアは尋ねる。

海「壊して無いから。大丈夫だよ。」

サ「…そうか。眉間にシワつくっていたから、てっきり腹でも壊したかと思ってさ。……まあ大丈夫ならいいや。」

そう言ってサファイアはツナ達との会話に戻る。

海「（…いつの間に眉間にシワ寄せてたんだろ……。とりあえず、
“あの噂”の事についてはまた後で考えよう。」

そして海人も、皆との会話に戻るのだった。

ツ「…ねえ、前から不思議に思っていたんだけど、『特別国際科』の人達って見たこと無いよね？」

海「あー、確かに。……他の学科の人達は見かけるのに、変だよな？」

『特別国際科』…それは、虹ヶ丘学園の中にある一つの学科の名前だ。

しかしこの学科だけ、存在こそはしているものの、外部募集どころか新入生すら募集をしていない。

ちなみに校舎もあるのだが、生徒を見る事は全くといって無いのである。

山「…そー言えばそうだな。」

純「僕も見ること無いなあ……」

獄「俺もです。……（ハッ！）ひょっとしたら何か秘密があるんじゃないですか10代目！！」

獄寺は、張り切ってツナに言う。

しかし……

サ「プツ……ハハハハハハハ！」

突然、サファイアが笑いだした。

獄「なっ……テメエ！！何がおかしい！！」

サ「ハハハ……だって……そんなにたいした秘密はねえーもん。あそこ。」

サ以外

「……………！！？」

サファイアの発言で驚く一同。

ツ「えっ……ええっ!？」

獄「テツ… テメエ!! 今なんて!!」

サ「…だから、特別国際科にはたいした秘密なんてねえって言ったの。……あ、でも何か政府がどうとか言ってたような……」

海「どっちだよ!! つーか知ってたんかい!! 特別国際科について!!」

サ「まあ、一応。」

さらりと答えるサファイア。

純「…じゃあ、化け物の正体については?」

サ「知らねーっつの。」

山「知り合いとかいるのか?」

サ「…何人かはな。」

純「ねえ、その人達の事について色々教えてよ。」

サ「プライバシーに障るから却下。」

純「ケチー。」

……一方。

獄「(何でよりによって、コイツなんか知っているんだよ……!!)！」

……自分が興味を持ち、今度調べ尽くそうとしていた事を、氣に
くわなサファイアい奴が知っていたのでイライラしている獄寺。

海「……獄寺君、どうしたの?」

……なんか、ものスッゴク怖いんだけど……と思いながら、恐る恐る聞く海人。

獄「……何でもねえよ。」

海「……そうなの。(……いや何かあったからイライラしてんだよね！！殺気出してんだよね！！隣にいる事がものスンゲー恐えーんだけど！！)」

…海人は心の中で、声に出したいけど出せない本音を言っていた。

純「…じゃあ、何時から知っていたの？僕、生まれて13年間サファちゃんのお隣さんやってるけど、初耳だよ？」

あしらわれたのに、負けじとサファイアに質問する純。

サ「…仕方ねえな……ありゃ、たしか初等部の三年」

……その時。

全員

「?!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

声が出た方向を、一斉に向く一同。

山「今、悲鳴が聞こえたよな…………!!」

純「そ、そうだよね!!」

ツ「……………ていうか、声のした方向って…………!!」

獄「……………?あの噂?の林の方向です、10代目!!」

海「(…本当にいたんだ……………化け物が……………!!)」

……………驚く五人。

サ「……………」

だがサファイアは……

ダッ！！

……走り出した。

ツ「！！……トウルヴィオンさん！！」

サ「お前等、先帰ってろ！！」

……どんだん林の方向へ走るサファイア。

海「サファ一人じゃ危険だよ!!…俺も行く!!」

純「僕も!!」

獄「俺達も行きましょう、10代目!!」

ツ「う……うん!!」

山「俺も行くぜ!!」

そして五人も走り出した……………。

タタタタタタ……！！！！

…さっき悲鳴が聞こえた方向を目指し、走るサファイア。

サ「(あの声、まさかだと思うが……！！)」

…左右を見渡し、悲鳴をあげた人物を捜す。

サ「(……チックショウ！！何処だ、何処にいるんだ！！)」

~~~~~

？」「ヴエッ……ヴエッ……ヴエッ……！！」

前回、化け物と鉢合わせしてしまった猫の飼い主。

悲鳴をあげた後、もんの凄い速さで逃げ出した（猫は抱き抱えられている）のだが……

ズシンズシンズシンズシン……！！！！

…その化け物が追いかけてくるのだ。

しかも仲間が何体かいたらしく、その仲間が合流しながら追いかけてくる。

…正に、恐怖倍増とはこの事をさすのだろう。

？「ヴェー……ッ！？何で増えているの……！！？うあああああん  
！！誰か助けてええええええええええっ！！……！！」



サ「……いた！」

サファイアはついに、助けを求める声の主を見つけたのだが……

サ「大丈夫か！！……ってハア！！！！？」

… サファイアは、その人の後ろを追いかけてくる化け物を見てしまった。

サ「……なっ… ななな何でこんなところ… ……！！！！！！！」

… サファイアは化け物の正体を見て驚きを隠せない。



海「サファイア……!どうしたの……!!」

……そこに海人達も合流。

海「一体なにがあつ……ええっ……!!?」

他四人

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

……その時、海人は冒頭で出て来た噂を改めて思い出した。

〈回想中〉

純「あるよ他にも。えーと、確か遠くから見た子がいてね……」

海「……それで？」

海人は純に聞きかえす。

純「……確か……、全身真っ白な感じで、デカくなった猿みたいだったって。」

〜回想終了〜

海「さ……猿どころか全然違うだろ……誰だよ猿って言った奴……あれは猿なんかじゃ無い!!っーか……………」

何でモンハンのブランゴがいるんだよおおおおおおおおおおおおお  
おおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

……そう、モンハンに出てくるブランゴ（計四体）が追いかけてきていたのだ。

？「うわああああああん！！そこどいてえーーーーッ！！！！！！」

……しかも全員、追いかけている人の真ん前に出て来てしまったので、一緒に追いかけられる羽目になった……………

続く

第四話「な…なんでこんなところだ!?!」始業式。化け物の正体。(後書き)

・・・アレ?話が終わらない!?

第五話に続きます!!

文才が欲しい&もうすぐ期末試験・・・。

2011年3月16日。

小説の内容を編集&一部改編致しました。

第五話「誰!？」 始業式。校庭でハンティング。(前書き)

テストから帰還してきました!!

第五話、どうぞ!!

## 第五話「誰!?」 始業式。校庭でハンティング。

くあらすじく

前回。悲鳴をあげた人物を探して見つけたら、化け物の正体がモンハンのブランゴ達だった事が判明して、一斉に逃げ出したs「海」逃げ出して訳じゃ無いから! !むしろ最悪なタイミングで巻き添え喰らってこうなっているだけだから!」『……アレ? そうだったけ? ……まあさておき、今サファイア達はそんな感じで逃げているのだ。』  
つた。

サ「アケザキいいいいいい!! テンメいいかげんにしやがれええええええええ!! !こっちは必死で逃げてんのに何呑気にボケてんだあああああつ!! !!!」

純「サファちゃん今この状況でそれ言っている場合じゃないからああああ!! !」

…そう言っている合間に、ブランゴがもう何体か合流する。(これで合計九体ぐらい)

ツ「ひいひいひい！！更に増えたあああああ！！」

？「ヴェエエエエエエ！！…ってアレ？サファちゃんだー！！c i a o c i a o」ねえ、今日はどうしたの？このあと暇？だったr  
『サ「言ってる場合かあああああ！！人の事いえねえけど状況を  
確認しろおおおおおお！！！大体、フェリ兄さんがこいつら引  
き連れてきちまったのがそもそもの原因だろがあああああ！！！  
！』』ウヴェエ！？俺のせいー！！！！？」

…この、猫を抱っこしながらヴェーヴェー言ってる、“くるん”  
としたあほ毛が特徴の男、

フェリ兄さん（仮名）はサファイアに走りながら（逃げながら）話  
しかけたのだが、逆に怒られた。

この二人のやり取りからして、知り合いどうしらしい。

（ちなみに、今回の騒動の発端となった猫の、飼い主の正体はコイ  
ツだ）

獄「…それにしても、UMAの一種である『イエティ』がまさかこ  
の学園にいたなんて…！！」

海「獄寺君！？違う！！『イエティ』違う！！これ『ブランゴ』！

！モンハンの『ブランゴ』だから！！」

…獄寺は『ブランゴ』をUMAの『イエティ』だと勘違いをしているらしい。

純「でも何でこんな所に『ブランゴ』がいるの海人！！！！！」

海「俺に聞くなあああ！！とりあえずこの状況をなんとか打破するのが先だあああ！！！」

ツ「でもどうやって打破するの！！！！！！！」

………確かに。

純「此処はやっぱり戦うしかないよ！！！！！！！」

純が提案する。



フ「ヴェエエエ！！！？無理だよーっ！！俺痛いのだよお  
おおおおおっ！！！」

サ「五月蠅ええええ！！！！戦うって言ってもこの間隔が狭い林  
じゃ圧倒的に不利だ！！どっか広い場所に出ねえと！！」

∴ サファイアの言葉通りで、この林は木々の間隔が狭い。皆が走っ  
ている開けた道の様な所が、この林の最大の広さなのである。

山「広い場所……そうか！！校庭だ！！校庭に出ればなんとかなる  
かもしれないぜ！！！」

海「なるほど！！校庭なら広いし、動きやすくなる！！」

サ「んじゃ決定だ！！とつとこのバケモンを校庭の方に誘導させ  
るぞ！！！」

∴ そして、サファイア達は校庭の方に向かって走り出した（フェリ  
兄さんは、嫌がっていたがサファイアが無理矢理連れて行った。）

~~~~~

・その頃の職員室・

黒「……つたく、新学期早々からトラブル起こしやがって……何時になつたら大人しくなるんだか……」

黒鋼先生は、緑茶を飲みながら休憩していた。

？「どうした？黒鋼センセ。」

黒「ああ、銀八か。またアイツがな……ってお前こそどうした！！？」

そこに銀八先生が現れたのだから、黒鋼先生はその姿に驚く。

銀「……いや、ちょっと色々あつてな……」

黒「色々って何があつたんだ！！ボロボロじゃねーか！！」

……そう、銀八先生はボロボロな状態になっていた。（一・五話参

照)

銀「まあ気にすんな。」

黒「いや気になるだろうが!」

〈5分後〉

黒「…んで、自分の生徒にぶっ飛ばされポロポロになったと。」

銀「おう。」

黒「そして、その後どうする事も出来なかったから、仕方なく残りのクラス替えの封筒を配り、そのまま始業式に出て、自分のクラスのHRを行ったと。」

銀「…そう言う事。」

銀八先生はこれまでの経緯を黒鋼先生に話した。

黒「…そりやお前が悪いだろ。」

銀「……俺は本当の事を言っただけだっつーの。」

ちなみに、銀八先生の姿は元に戻っている。

銀「しつかし、新八のキレた顔凄かったな……下手すりゃ？あの噂？の奴が新八だったりして。」

黒「あ？何がだ？」

銀「新八の顔が。」

黒「いやその前。何だ？？あの噂？つて。」

緑茶を啜りながら、銀八に聞く黒鋼先生。

銀「あ、知らねーのか？ウチの校舎と特別国際科の間にある林に化け物が出たってヤツ。」

黒「あー…あれか。」

黒鋼先生は納得する。

黒「本当にいんのか、ソレ？」

銀「現に何人かの生徒が見てるんだと。ま、俺は信じちゃねーけどな。」

黒「……………」

突然、黙り込む黒鋼先生。

銀「どうした？黒鋼。」

黒「…いや、さっきその方向から絶叫が聞こえたんだが……………」

銀「あー、そーいや俺も聞いたな……………」

黒「……………」

銀「……………」

~~~~~

- 校庭 -

サ「よし、着いたぞ!！」

サファイア達は校庭に辿り着いた。

そして……

ズシンズシンズシンズシン……!!!!

ブランゴ達を誘導させる事にも成功した。

ツ「でもこれからどうするの……!?!」

サ「心配すんな!!--これから此処で……」

サファイアはクルツと180度方向転換する。

サ「迎え討つ!!--!!--」

そして、何処から取り出したかわからないが……サファイアの手には、愛用している武器……“バニシングロッド”が握られていた。

サ「いつくぜー！！」  
『My favorites color  
“Red”』……！！

…サファイアがそう叫ぶと、ロッドの両端が緋色に染まる。

サ「必殺！！？激しき龍の炎？！！！！」  
インテンス・ドラゴ・フレイム

そして、ロッドの片端を『ブランゴ』達の前に突き出すと……

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

物凄い炎の塊が龍の様に舞い、『ブランゴ』達を包み込む。

獄「何やってんだテメエ！！せつかく発見したUMAを丸焼きにしやがって！！」

海「だからUMAじゃねーって言ってんだろ！！何度言えば分かるんだよ！！！！」

……まだ勘違いしてたんかい。

山「す、凄い威力だな……」

フ「ヴェー……」

その威力に驚く一同。

純「…ねえ、あれ死んじゃったのかな？」

サ「大丈夫大丈夫。ちょっとやさっとじゃ死なねーってあーゆーの。」



モンハンでもあるでしょーが。いくら攻撃して体力を削ったとしても、あいつら見た目ピンピンしてるからへーきへーき。」

海「平気じゃねーよ！！それで何かあったら俺らただじゃ済まされない気がするんだけどー！！」

サ「大丈夫だって、例え何かあったとしても体毛がちよこつと焦げてるだけで済むって。」

…それで済まされない気もするのだが。

ツ「(……ていうか、トゥールヴィオンさんの武器って一体どんな構造になっているんだろ……！？)」

それは皆さんの御想像にお任せします。

サ「よしっ、そろそろ大丈夫だろ。」

サファイアは武器を下げる。

『ブランゴ』達がいた所はシュウシュウと煙りが出ていた。

海「…ねえ、なんかヤバくない……………!?」

…煙りが去り、そこから物体が現れる。

身体は黒くゴツい物になっており、そこから油の臭いが漂ってくる。

そして、どこことなくウィーンと言いつ機械音。

グオオオオオオオオオオオオオオオオ……………!!……………!!……………!!……………!!……………!!



黒「当たり前だろう。さっきの絶叫がもし生徒の悲鳴だったら、なんらかの危険に巻き込まれた可能性がある。」

そう言つて黒鋼先生は先に進む。

銀「でもよ、ウチ（虹ヶ丘）には最強の風紀委員会がいんだろ。そいつらに全部任せりゃいいだろうが。」

銀八先生は言いながら黒鋼先生についてくる。

ちなみに虹ヶ丘学園には、最強で最凶の風紀委員会があるのだが……この話はまた別の機会に。

黒「それでも、何かあった後じゃ遅せーだろ。」

銀「………確かにそうだけだよ。」

~~~~~

- 校庭 -

「ブルオオオオオ!!!!」

サ「ハアアアアアアツツ!!!!」

ガキンツ!!!!

サ「く……………くううっ……………!!!!」

……………今、校庭は人間と『ブランゴ』がたたか……………否、化け物がぶつかる戦場と化していた。

何故再び化け物と呼び直したか、それはその相手の今の状態が鍵となる。

全身が黒く、鋼鉄に覆われた外装。

身体のうちこちらから出ているワイヤーの数々。

…そして、ウィーンという機械音をたてながら繰り出される攻撃。

ブオオオンッ！！！

サ「ヤベッ！！！」

獄「任せる！！《フレイムアロー》！！」

バシユユユン！！！

獄寺が化け物に技を放つ。

「グルアアアアアアアアアア！！！！」

∴技は見事、化け物に当たった。

サ「すまねえ、獄寺！！」

獄「礼言ってる暇があんならさっさと戦え！！」

サ「わかってらあ！！！！」

純「円舞“春告げの舞”！！」

バスウウウツツ!!

「グワアアアア!!」

純「ハア、やれやれだよ。こんなに面倒臭いヤツの相手なんて。」

純は中華刀「暗黒龍」で戦っていた。

純「ハア……まさかあいつら、『ロボット』だったなんてね。驚きだよ全く。」

……そう、『ブランゴ』達は『ロボット』だったのだ。

…もつと正確に言うなら、『ブランゴ』の皮（忠実に再現されたもの）を被っていた『ロボット』。

それが発覚したのは煙りが去り、咆哮が轟いたあとの事だった。

咆哮が轟いた後、サファイア達に襲い掛かってきたのだ。

幸いにも全員回避出来たため、怪我人は出なかった。

だがこのままではまずいと全員が思い、戦闘態勢に入った。（フェリ兄さんは戦力にならないとサファイアに言われたため、海人と一緒に校内に避難した。）

今、サファイア達は各自持っている武器でロボット達と戦っている。（ツナはXグローブ、獄寺はスイステーマCAI、山本はアニマルリングの次郎に預けていた小刀を使っている）

純「まあ、ストレス発散に適しているかもねっ！！！！！！」

ズバアアアアアン！！！！！

「グアアア……ガピピッ……ピガーッ……！！！！」

ドガアアアアアン！！！！！！！！

純「よしっ。撃破成功」

~~~~~

- 校内・廊下 -

海「く……黒鋼先生！！坂田先生！！」

黒「関根！？お前下校したはずだろ！！どうして此処に！！」

銀「ていうか隣にいるの誰！？何で猫抱えてんの！！？」

海「話は後です！それよりも先生！！今校庭がヤバい事になっているんです！！！化け物みたいなロボットが暴れているんです！！！」

黒・銀「！！！！！！！！！！」

黒鋼先生と銀八は驚く。

海「それで、今サファ達が戦っているんです！！！」

黒「……その話は本当だろうか？」

海「本当です！！！」

黒「……分かった。銀八、コイツ等を頼むぞ。」

そう言つて、黒鋼先生は急いで校庭に向かった。

フ「ヴェ〜!!怖かったよ〜!!ヴェー!ヴェー!」

猫「ヴェニヤー!!ヴェニヤー!!」

銀「……ところで関根、ホントコイツ誰?さつきから猫共々ヴェーヴェー五月蠅いんだけど。」

海「……とりあえず気にしないでください。」

銀「いや、気にするからね。」

- 校庭 -

山「時雨蒼燕流攻式八の型“篠の突く雨”!!」

ズバァァアアツツ！！！！！！

ドガァァァアアアン！！！！！！！！

サ「山本！！そっちはどうだ！！」

山本の所にサファイアが駆け付ける。

山「ああ、何とか片付いたぜ。……それにしてもトウルヴィオン  
って強いのかな。」

サ「そりゃ伊達に暴れてねえからな。……後残り何体だ？」

山「……後2、3体位つてとこだな。」

サ「オーケイ。それ聞いてやる気出たわ。……山本も気いつけるよ  
！！」

山「おう！トウルヴィオンもな！！」

そして、二人は残りのロボットを倒しに行った。

ツ「ハアツ……ハアツ……ハアツ……！！」

……ツナは、苦戦を強いられていた。

今、ツナが相手にしているロボット……BT01号と番号がついてある奴は、強さが他のと明らかに違った。

……何度相手のすきをついても、すぐに反撃されてしまうのである。

ツ「もう一度……！！」

ツナは攻撃に入る。

ツ「……………!!」

……………だが不意を突かれ回避されてしまった。

そして……

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ツ「……………!!?」

ツナの背後にロボットが……!!

ツクツク……!!

やられる……!!

ツナがそう思ったときだった。

？「破魔 竜王刃」!!







？「全く、こんな奴らにていずってやがったのか。」

ツ「……………」

ツナはロボットを斬った人物の正体を見た。

？「大丈夫か、沢田。」

ツ「……………黒鋼先生……………！！」

片手に竹刀を持った、黒鋼先生だった。

黒「ボサツとすんな。……次行くぞ。」

サ「コイツで、後一体っ！……！」

サファイアはロボットに向けてロッドを構える。

サ「『My favorite color “Blue”』！」

両端が今度は蒼く染まる。

サ「行くぜ！！？蒼き流水の矢？！！！！」  
フルー・ウオーティ・アロー

サファイアはそう言うと、ロッドの先端を前に突き出す。

すると何処からか水が溢れ出し、無数の矢の様にロボットに向かって飛んでいく。

バスバスバスウウツツ！！！！！！

ドガアアアアアン！！！！！！

………ロボットを破壊した。



サ「な…なんだ！？今の音！！」

サファイアはその音のした方向を見る。

…そこには、地面が一直線にえぐられた跡があった。

サ「はあああつ！！！？一体誰が！？」

その跡が細くなっている方向を見た。

そこにいたのは……

サ「さっ……沢田あ……！！！！？」

ツナだった。



5分後

サ「はあ、やっと終わったな。」

銀「つか、俺が行く間に何があったの？何で地面がえぐれてんの？」

…ツナが最後の一体を倒したあと、銀八先生達も合流した。

フ「うわ〜！！すっげえ〜！！」

…この騒ぎを起こしたある意味張本人のフェリ兄さん（仮）は、えぐれた地面（ツナの技、Xバーナーを撃った跡）を見て驚いていた。

ツ「それにしても、化け物の正体が、まさか機械だったなんて…  
…」



ちよつとだけ続く。

第五話「誰!？」 始業式。校庭でハンティング。(後書き)

ちよつとだけ続きますよ。

2011年3月17日。

小説の編集&一部改編致しました。

第五・五話「噛み殺す……!!」始業式。最凶委員長来たる。(前書き)

前回の続きです。

それでは、いきまーす!!

第五・五話「噛み殺す……!!」 始業式。最凶委員長来たる。

フ「ヴェー、今日は本当にありがとう!」

猫「ヴェニヤ〜!」

サ「…次から気をつけるよな、フェリ兄さん。」

獄「ったく、コイツのせいで俺達は……!」

純「まあまあ、エキサイトしないでおこつよ。」

みんなが一通り話し終わった後、フェリ兄さん（仮）は帰る事にした。

フ「サファちゃん、今度みんなと一緒にいっばいお出かけしようね  
あ、君達も一緒」  
『サ「その前に、これ以上面倒事を起こさないでよね。」  
『ヴェー!!俺そんな事しないよー!!」

……いや、十分に起こしているからね。

フ「Arrivederci!!みんな〜!!」

猫「ヴェニヤ〜」

タッタッタッタ……………。

そして、林の方向へ走り去って行った。

銀「…んでよ、あいつ一体誰なの?」

ツ「ていうか、林の方に走って行ったんですけど……………」。

海「サファアの知り合い?」

サ「おう、フェリ兄さんは『特別国際科』の生徒だけ。」

全員（サ以外）

「……………!!」

ツ「エエー！ツ！！！？」

海「ウツソ！！？」

獄「な…マジかよ…！！！」

山「トウルヴィオンの知り合って凄いな！！！」

純「へー、あの人がそうなんだ！」

銀「つーか本当にいたの！？」

黒「…どおりで見かけねえ顔だと思ったら、そうだったのか。」

一同、驚きを隠せない。(ていうか、先生達も知らなかったんかい  
……………)

海「ど…何処で知り合ったの？」

海人はサファイアに質問する。



サ「初等部の頃だったかな。三年生に上がる前位の時。」

海「そうだったの……」

サ「おう。」

お前、凄すぎだよなという空気が出ていたときだった。

？「君達、此处で何してるの。」

全員

「!!!!!!!!!!!!!!?」

みんなが一斉に振り返ると、そこにはかなり不機嫌な顔をしている学ランの生徒がいた。

学ランの袖には『風紀委員会』と書かれた腕章がある。

?「群れてると、噛み殺すよ。」

虹ヶ丘学園中等部風紀委員会委員長……雲雀恭弥うんすけは、殺気を放ちながらそこにいた。

ツ「ヒイイイツ!! 雲雀さん!!」

銀「げっ!? 雲雀い!!」

海「俺達、何にもしてないですよー!!」

……その声に構うことなく、雲雀は校庭の現状を確認し、こう言い放った。

雲「草壁から報告を受けてね、此処で化け物が暴れていたらしいけど……始末したのは君達なの？」

雲雀はこう尋ねる。

サ「おうよ。……まあ正しく言うと、俺が全部やった。」

全員（サ、雲以外）

「……………」

ツ「え！？ちよつと、トゥールヴィオンさん！！」（小声）

サ「五月蠅い、黙って口裏合わせろ。（小声）」

サファイアが雲雀に言い放った事に一同は驚くが、サファイアは続けてこう言った。

サ「どうした、納得出来ねーのか？……雲雀恭弥さんよお。」

雲「……ふうん。また君がやったんだね。サファイア・トゥールヴィオン。」

殺気をみなぎらせて言うサファイアに、雲雀はこう返した。

サ「そうだ。全部俺が殺ってやったよ。……何か文句でもあんのか。」

雲「……せつかくその化け物を噛み殺したかったのに、全部君が殺ったんだね。……じゃあ今度は君が……」

雲雀は愛用のトンファーを構える。

雲「その代わりになってくれるのかな。」

サ「いいねえ。……そうさせてもらっぜ！……！！！」

サファイアも武器を構え、お互い睨み合い、殺気を放ち合う。

海「ギヤアアアア！！戦闘態勢に入ったああああ！！！！！！！！！！」

もう駄目かと思われたその時。

ブオオオオン！！

…投げられた竹刀が、二人の間を横切った。

黒「そこまでだ。二人共、武器をしまえ。」

竹刀を投げたのは黒鋼先生だった。

黒「雲雀、確か他にも仕事があったはずだ。そいつを片付けてからやれ。……トウルヴィオンも、とっくに下校時間を過ぎてんだろうが。さっさと帰れ。」

黒鋼先生は冷静に言った。

サ「……わかったよ。黒鋼先生。」

サファイアは武器を下げる。

雲「待つてよ、まだ話についてないよ。」

…しかし雲雀は、武器を下げずに臨戦態勢に入っていた。

黒「殺気を抑える雲雀。今此処で戦うよりも、自分の仕事に戻った方がいい。それに、またトゥールヴィオンと戦うチャンスは沢山あるんだろ。楽しみは後に取っておけばいい。……そうした方が、戦ったときに暴れがいがある。」

黒鋼先生がそう言うと、雲雀はようやく武器を下げた。

…不機嫌なのは変わらないが。

雲「……そうする事にするよ。但し、次にこういう事があつたら真  
つ先に君を噛み殺してあげる。サファイア・トウルヴィオン。」

サ「……そんな時は、逆にアンタの全てを壊して喰らつてやるよ。雲  
雀さん。」

- 校門 -

サ「ふああゝつ……疲れたあ。」

あの後、サファイア達は雲雀から「とりあえず、その残骸は片付け  
ておいてよね。」と言われてその処理をし、ようやく下校した。

ツ「あの……トウルヴィオンさん。」

サ「なんだあ、沢田。」



ツ「雲雀さんが来たときに、ひょっとして俺達の事を庇ってくれた？」

ツナはサファイアに質問する。

サ「？……何でそんな回りくどい事しなきゃなんねーの、俺が。」

ツ「ええっ！？」

海「えっ！？あれ違うの！！？」

海人も驚く。

サ「……言つとくが、あれは俺のダチが起こした事。本来ならその場でみっちりそいつに謝らせるが、先に帰しちゃったから仕方なくああしただけだ。」

勘違いするな。とサファイアは言った。

サ「まあ、今度フェリ兄さんに会って、今日みたいな事があつたら、  
ぜってーその場でお説教決定だけど。」

ツ「そ、そうなんだ……（絶対それだけじゃ済まされない気がする  
んだけど……！！！！）」

ツナは悪寒がした。

山「でも、トゥールヴィオンも本当に強いよな。」

獄「認めたくねーけどよ。」

サ「ああ。伊達に大暴れしてねーし、場数もそれなりにふんでねー  
からな。……腕っ節にも自信があるし。」

自信たっぷりと言うサファイア。

純「でも、それだから『女の子らしくない』なんて言われちゃうん  
だよな。」

サ「んな事ねーよ！！俺はれっきとした女だ！！なあ海人！！！！」

海「そうですね。（超棒読み）」

サ「……『いとも!』みたいに言うなーっ!!!」

……正しくはその番組コーナーの、『テレオンヨッキン』だ  
けどな。

そんな感じで、サファイア達は家路についたのだった。

- ???? -

?「あーあ。失敗かあ……『ブランゴ』型のロボットっていい線い  
つてたんだんだけどな。」

ある場所で、謎の人物がパソコンをいじりながら言っていた。

？「まあいいや。……もっと面白い物を、次に造ればいい話だからね。」

パソコンを操作し、画面に虹ヶ丘学園の画像が出る。

？「この学園は全て俺の実験台だから　アハハ…アハハハハハ！！  
！……！」

まるで、世の中にある全てのものを全部否定するかの様に……



第五・五話「噛み殺す……!!」始業式。最凶委員長来たる。(後書き)

2011年3月17日。

小説の内容を編集&一部改編致しました。

登場キャラクターまとめ集（一話〜五・五話まで）（前書き）

いままでに出てきたキャラクター達をまとめてみました。

この小説内の設定も書いてあります。

では、スタート！

## 登場キャラクターまとめ集（一話〜五・五話まで）

### 第一話から登場

坂田 銀八（国語科教諭）

- ・登場作品：銀魂（三年乙組銀八先生）より
- ・言わずと知れた、白髪のパパー教師。
- ・国語教師なのに白衣を着ている。

この作品では、高等部普通科の国語教師を担当しています。また、黒鋼先生と同期（しかも同じ年）という設定があります。

### 第一・五話から登場

志村 新八（高等部三年生）

- ・登場作品：銀魂（三年乙組銀八先生）より
- ・銀魂の主要キャラクターで、ツッコミ担当の眼鏡君。
- ・人気アイドル、寺門通のおっかけ&ファンクラブ『寺門通親衛隊』の隊長。
- ・おっかない姉ちゃん がいる。

この作品でまだ一回しかでてないなあ・・・貴重なツッコミ君なのに・・・。

高等部話をそのうち書くので、その辺りで絡ませようと思います。



## 第二話から登場

沢田 綱吉（中等部二年A組生徒）

・登場作品：家庭教師ヒットマンREBORN！

・REBORN！の主人公。

・巨大なマフィアの組織『ボンゴレファミリー』の次期10代目ボス。

・あだ名はツナ

・使用武器はXグロブ&アニマルリングのナッツ（ライオン）。

貴重なツッコミ担当です。

サファイアと会話することが多くなるかもしれません。

海人とは仲が良く、近所同士という設定です。

獄寺 隼人（中等部二年A組生徒）

・登場作品：家庭教師ヒットマンREBORN！

・自称10代目の右腕<sup>ツナ</sup>。

・ツナを慕っている。

・趣味はピアノ。

・月刊『世界の謎と不思議』の愛読者。

・使用武器はダイナマイト&スイステーマCAI、後アニマルリングの瓜（豹）。

サファイアとはあまり仲が良くありません。むしろ、気に入らないらしい。

頭がいいので、他のキャラと勉強対決でもさせたいです。

山本 武（中等部二年A組生徒）

- ・登場作品：家庭教師ヒットマンREBORN！
- ・野球が大好き。
- ・野球部部員。
- ・将来の夢はプロ野球選手になる事。
- ・『生まれながらの殺し屋』と評価される位、凄い運動能力を持っている。
- ・使用武器は時雨金時、アニマルリングの次郎（柴犬）と小次郎（燕）。

この小説内でも野球部に入っています。そのうち書きたいですね。純と仲がいいです。

笹川 京子（二年A組生徒）

- ・登場作品：家庭教師ヒットマンREBORN！
- ・天真爛漫のな女の子。
- ・前向きでおおらかな心を持っている。
- ・好きな遊園地のアトラクションはフリーフォール、絶叫系。

京子ちゃんはサファイアと仲良しです。後、これから出る予定のオリ主の女の子とも仲がいいですよ。

黒鋼（二年A組担任、保健体育教諭）

・登場作品：ツバサ・クロニクル（私立堀鐔学園）

・ツバサ・クロニクルの主要キャラ。

・日本国の忍者。

・破魔刀・銀龍が武器。

・番外編の堀鐔学園では、教師設定で運動部総括顧問をしている。

黒鋼は体育教師設定にしています。銀八先生とは同じ年で同期同士ということもあって、タメで話しているという設定です。

ツバサの設定も少し入っています。

（この小説用に、アレンジしてあります）

## 第五話から登場

フェリ兄さん（仮名、特別国際科在籍生徒）

・登場作品：?????

・くるんとしたあほ毛が特徴。

・「ヴェー」という声は生理現象。

・ヘタレ。

これだけでも誰だか判りそうですね……。

特別国際科についてはまた別の話でゆっくりと書きたいと思います。

## 第五・五話から登場

雲雀 恭弥（虹ヶ丘学園中等部風紀委員会委員長）

- ・登場作品：家庭教師ヒットマンREBORN！
- ・最強の不良。
- ・群れる人間を毛嫌いしている。
- ・風紀委員会の委員長。
- ・使用武器は仕込みトンファー、アニマルリングのロール（ハリネズミ）。
- ・ヒバードという小鳥を飼っている。

この小説でも風紀委員会委員長をしています。（中等部担当）  
サファイアとは、事件が起こる度に衝突をしています。（時々、バトっている）

そのうち共闘させてみようかなあと思っています。

登場キャラクターまとめ集（一話〜五・五話まで）（後書き）

いかがだったでしょうか？

これから、区切りがいいところでキャラクター集を書きたいと思  
います。

そのうち、設定集をつくりましようかね・・・。

第六話「出てってやるう!」四月下旬。ある日の出来事（前編）。（前書き）

ながらくお待たせ致しました。

今回は、前後編でおおくり致します。

前編はオリキャラ達中心でいきます。

第六話「出てってやるうー!!」四月下旬。ある日の出来事(前編)。

四月も下旬に入る頃……。

父「コラァ!!今日という今日は許さんからなあ!!!!」

娘「うるっさああああああい!!いいでしょ別に!!私の相手はもつとつくに決まってるんだからあああああ!!!!」

……ある夜のこと、一軒の木造屋敷で父と娘が大喧嘩をしていた。

娘「いい加減諦めてよ!!絶対嫌だから!!親に決められた相手と結婚とかそうゆうの!!!!」

父「じゃっかあしい!!お前はこの“滝下家”を継ぐ次期当主だ!!そんな馬の骨の知れん奴にお前は絶対やれん!!やらせんぞおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

お父さん、激しく激怒。

どうやら、娘の恋愛関連について喧嘩しているらしい。

娘「もういい！！今日こそこんな家出てってやるううううううううううううう！！！！」

…そして、娘は自分の部屋に駆け込み、『家出セット』と書かれた大きなリュックを背負い、あらかじめ用意してあった外履きの靴を履くと、庭に出て塀をよじ登る。

父「ゴラアアア！！待て！！待つんだああああ！！！！」

そこに父親登場。娘は塀を登りきった。

娘「誰が待つもんですか！！」

娘はリュックからあるものを取り出し、地面に向かっておもいき





娘「ざまみるバーカっ!!」

……そして塀の上から隣の家の屋根に跳び移る。

まるで闇夜を華麗に舞う忍の様に……………。

~~~~~

?「…んで、俺の家に来たと。」

娘「まあ、そうゆうことになるんじゃないの。」

あるアパートの一室で、さっきの娘と男子学生が話し合っている。

娘の方は「滝下香苗」。虹ヶ丘学園中等部三年生の少女である。自称、クールなお姉さんだ。

男子学生の方は「アーウィン・キアス・ペトルーシユカ」。同じく虹ヶ丘学園の学生で、この部屋の主だ。(アーウィンは高等部に所属している。)

二人は恋人同士なのだが、ちょっとした凸凹コンビでもある。

ア「……それはかまわんが、一つ聞きたい事がある。」

香「……………何?」

ア「……何故お前は家出をする度、毎回俺の所に来るんだ。」

…そう、香苗は今回が初めての家出ではない。

実を言うと、父親と喧嘩する度にアーウィンの所にしょっちゅう来ているのだ。

たしかに。この回数は多すぎる。

香「だからお願い…此处に何日か泊まらせて。」

香苗はアーウィンに願う。

ア「……っ！か何で俺ん家なんだ。他に行くところ無いのかよ。」

ごもつとも。

香「えっ！そ……それはそのっ……あのっ……／＼／」

香苗は急にもじもじします。

ア「なんだ？」

香「べ…別にあなたと一緒にいたいとかっ……そ、そんな理由でわざわざ来て……る訳じゃ無いんだからねっ……！！！！／＼／＼／」

ビシツと右の人差し指をアーウィンに向けて言う香苗。

ア「おーい、本音が出てるぞ。」

冷静に突っ込むアーウィン。本来のツツコミは香苗なのだか、こうなるとアーウィンがつつこむしか無いのだ。

香「ともかく此処に泊まらせて!!」

ムキになる香苗。

ア「……仕方ない、此処に泊まれ。ただし三日間だけだ。三日後にはちゃんと家に帰れよ。ツンデレ娘。」

香「だっ…誰がツンデレよ!!」

ア「だからそれがツンデレなんだっつーの。」

「次の日」

その後、香苗はアーウィンの寝室を使わせて貰う事になった。

（アーウィンは居間で布団を敷いて寝た。）

そして朝は各自身支度をし、朝食（香苗が作った）を食べて家を出た。

・通学路・

二人は一緒に並んで歩いていた。

そこに……

サ「おはよう。お二人さん。」

サファイア登場。

ア「はよっす。」

香「おはよう。」

…ちなみに、この二人とサファイアはなんらかの付き合いがあり、アーウィンに関してはサファイアの兄さんが友達である。

サ「しかし相変わらず仲が良いですな。お二方。今日も二人仲良く登校？」

香「ち………違うから！ちょっと色々あって一緒に登校しているだけだから！！」

サ「…そうなのウインちゃん？」

サファイアはアーウィンに質問する。

ア「『ちゃん』は余計だ。…実は、またコイツが家出して来てな…」

香「ちょっと！！ホントの事言わないで！！」

サ「オイオイ、また家出したのかよカナっち。」

香「『また』って何よ!!!『また』って!!--いいでしょ別に!!--!」

サファイアに呆れられる香苗。まあそうだよね……。

サ「良くねーっての。ウインもよくカナっちみたい な女子と付き合えるよな。何か秘訣とかあんの?」

ア「特に何も無いが。」

サ「そうなんだ…まあいいや。じゃお二人さん。俺は先に行くから、またなーっ。」

そう言うとサファイアは駆け足で走り去って行った。

香「……ハア。何だったの一体?」

ア「半分は挨拶で残りは冷やかしだろう。」

そして、二人もまた歩き始める。

ガサガサ……

？「……香苗めえ……やっと見つけたぞ。」

その様子を、後ろの木の陰から見ていた男が一人いた。

子「ママー。あそこに変なおじちゃんがいるよおー。」

母「しっ！見ちゃ駄目よ！！いきましょ！！！！」

……その男の様子を見ていた親子もいたけどね。

~~~~~

「お昼休み」

さて、なんやかんやでお昼休み。（早ッ！！）香苗達は裏庭に来ていた。

香「……………はい。」

ア「ん？」

香苗がアーウィンに差し出したものは、一つの弁当箱。

香「…あっ、あんたのために作った…訳じゃないからっ！！とっ…  
…とととりあえず…かつ………………感謝して食べなさい！！！！／／／／／  
／」

ア「はいはい。」

アーウィンは弁当箱を受け取った。

ア「じゃあ、いただきます。」

香「…いただきます／＼」

アーウィンは弁当のおかずを食べる。

ア「ん！美味しい。…また腕を上げたな。」

香「……そ……そう……かな？／＼」

香苗は照れる。

ア「いや、マジ美味しい。スゲーよこれ。」

香「ほ……ホントに？／＼／＼」

ア「ああ。これ美味しいぞ。野菜のナムル。」

香「……………」

その言葉を聞いた途端、無言になる香苗。

ア「……………どうした？香苗。」

ア「ウインは尋ねる。」

香「……………それ、冷食なんだけど……………あんたん家の冷蔵庫にあったやつ……………」

ア「えっ……………あっ!?(ヤベッ!これ昨日買った冷食のやつ!!)」

ア「ウイン、気づく。」

香「……………」

香苗は再び無言になる。

ア「…お…おい、か」香「…次は。」…?」

俯く香苗にアーウインは声をかけたが、遮られた。

香「次は…それよりも美味しいやつ…作ってあげる…だから…」

香苗は俯いたまま、アーウインに言う。

香「…だから…次絶対間違えんなバカアアツ!!!」

アーウインに顔を向けた瞬間。

香苗は顔が真っ赤な拳げ句、ちょっと涙目になっていた。  
「…か、今にも泣きだしそう…」。

ア「(しまった…香苗ってかなり繊細なんだった!!)わ…悪かった!スマン!!」

ちなみに、香苗がどれくらい繊細なのかと言つと、超ガラスのハート級です。

それから香苗を宥めること20分。

何とか機嫌が直り、うららかな空の下でお弁当タイムを再開した。

だが……

ヒュン……！！

二人にめがけて、何かが飛んできた。

二人「!!!!!!!!!!!!!!」

二人はサツとかわす。

飛んできたものは、クナイだった。

ア「……………!!」

香「何でクナイが……………!!」

カウ「……………」

カウカウカウ……



アーウィンに向かって、手裏剣が何個か飛んできた。

ア「クッ!!」

アーウィンは全部かわす。

その様子を見て、香苗は手裏剣の飛んできた方向を睨む。

香「何奴っ!!」

香苗も手裏剣をだし、その方向……近くの木に向かって投げる。

ガサガサッ!!!!

そこから、

一人の男が姿を現した。

男「くおおおら香苗！！昏間っからそんな軟弱な男とイチャつきおつてからに！！！！」

そして、いきなり香苗に怒鳴り始めた。

香「・・・お父さん！！！！」

…その男の正体は、香苗の父さんだった。

続  
く

第六話「出てってやるう!!」「四月下旬。ある日の出来事（前編）。（後書き）

今回は後編をおおくり致します。

アニメキャラ達もそこで出てきます。

すみません……。

なるべく今日中、出来なくても明日には投稿致します!!

2011年3月17日。

小説の内容を編集&一部改編致しました。

第七話「出てっぺやろー!」四月下旬。ある日の出来事（後編）。（前書き）

すみません！

昨日までに投稿できませんでした・・・。

お待たせ致しました事をお詫び申し上げます。

第七話「出て行ってやるうー!!」四月下旬。ある日の出来事（後編）。

香「…………お父さん!!!!」

前回、お弁当の時間にクナイを投げてきた犯人が香苗のお父さんだった。

父「香苗!!こんな軟弱な男と付き合いおって!!!!」

香「失礼ね!ウインは軟弱なんかじゃないから!!誰と付き合いおつが私の勝手でしょ!!」

香苗と父親は口喧嘩を始める。

父「五月蠅い!!こんな男なんかにたぶらかされおって!!」

香「たぶらかされてない!!」

父「それでも滝下家を継ぐ者が馬鹿者!!」

香「その何が悪いの!!好きなやつと一緒にいる事が!!第一ウインについては家も近所だし、よく一緒に遊んでたし、お父さんだつてウインの事知っているじゃない!!」

香苗の一言に父親はついにぶちギレ、アーウインの方に怒鳴る。

父「オイ!!よくも娘をたらしこんだな!!今すぐここで勝負しろ!!お前が勝つたら娘をやる!!ワシが勝つたら娘から手を引け!!」

父親の言葉にアーウインは答える。

ア「……わかった。俺が勝てば香苗と付き合っ方がいいんだな。」

父「ああ!そうだ!」

ア「……ならその勝負、受けてたつ!」

香「はあ!?!ちよつと!勝手に決めないでよ!?!」

香苗は嫌がるが、二人は聞いてない。

父「なら武器を出せ！！構えろ！！」

父親は戦闘体制に入る。

ア「…臨むところだ。」

アーウィンも懐から“ハーツ・クロス”を出す。

ア「……戦闘開始。」

そしてクロスが変形し、槍になる。

香「（どうしよう……！！大変な事になっちゃった……！！）」



~~~~~

〜その頃のサファイア〜

サ」〜……………」

……………サファイアは鼻歌を歌いながら、廊下を歩いていた。

？」「……………」

階段の影に隠れながら、その後ろをつけている生徒達がいた。

？」「……………ホントこれ大丈夫なの？サファをつけたりなんかしてさ
……………（小声）「

? 2 「でも、やんなきゃ 『特別国際科』 の秘密に迫る事が出来ないよ。(小声)」

? 3 「うるせえ!!! 少し黙ってる!!! (小声)」

……海人、純、獄寺、山本、ツナの五人である。

理由は、『特別国際科』のことに詳しく調べる為。

というのも、この間の“化け物騒動”で追いかけていた人物が『特別国際科』の生徒で、サファイアの知り合いだった(四話
五・五話参照) のである。

そしてサファイア本人も『特別国際科』について色々知っている様子だった。

……だが、サファイアは特別国際科のことを質問しても中々答えてくれなかった。

そのため、“サファイアをつけていれば何か判るかもしれない”と
いうことで尾行しているのだ。

海「でも、命の保障とかホント出来ないよ……！！」（小声）「

ツ「マジで！？」（小声）「

純「大丈夫だよ。サファちゃんは、あー見えて結構優しいところがあるんだ。ばれても理由を話せば、きっと分かってくれるよ。（小声）「

山「ハハハ。トゥールヴィオンの事、色々知ってるのな。（小声）「

純「まあね 伊達に幼なじみやってないから。（小声）「

そんな会話を繰り返しているうちに、サファイアは廊下の角を曲がる。

獄「……右に曲がった！追っぞ！！」（小声）「

ちなみに、つけられている本人は……

サ」(あいしら……一体何してんだ?)

既に気づいていた。

~~~~~

キイイイイン!!

裏庭では戦いが始まっていた。

戦局は香苗父がガンガン攻めている。

キイイン!!ガキイツ!キイイツ!キイイン!!

父「どうした！…いつまでも防御に徹してはその身を滅ぼすだけだぞ！…」

ア「……………」

アーウィンは、無言で攻撃を槍で防ぐ。

父「無言か…まあいい。いつまでもその余裕が続くと思つな！…」

ヒュヒュヒュンッ！…

父親は素早く手裏剣をつつ。

ア「ハッ！…」

だがアーウィンも槍を回転させ、手裏剣を弾く。

父「なら、これならどうだ!!」

父親は懐からクナイを出す。

父「これで終いだ!!」

ジュジュンッ!!

香苗父はクナイをうつ。

ア「……………!!」

ア「ウィンは間髪なくかわす。」

父「はあああああああっ!!!!!!」

そして、父親が後ろから突っ込んできた。

そんな戦いの様子を、香苗は見ていた。

香「（全く……いつつもいつつも好き勝手な事言っ……しかも学校の裏庭で決闘……私も勝手だけとお父さんも勝手過ぎる！！）」

ここで補足をするが、アーウィンは香苗が忍の一族だという事を知っている。

元々香苗とは小学生の頃から一緒に遊んでいた仲で、家も近かったことから、ちよくちよく家に遊びに行っていた。

そこで手裏剣やらクナイやら見せられていたので、ある程度耐性は出来ている。

香「（……まあ、ウインもウインでアレだけどさ……大丈夫だと



は思っけど……………」

そんなことを考えながら、見守っていた。

~~~~~

一方、サファイアも裏庭方面に向かっていった。

五人

「……………」

五人も、サファイアの尾行を続けていた。

そして、ふとサファイアが立ち止まった。

サ「……………オイ。誰だ？俺をつけまわしている奴らは。」

五人

「!!!!!!!!!!!!!!」

バレてる！？と五人は思った。

サ「……………何こそこそ尾行してんだ。さっさと顔出しやがれ。」

山「あちゃーっ……………ばれてたのな。」

純「もうちょっといけるかなあ、とってたんだけどね。」

海「あ……………アハハハハ……………」

獄「……………ケツ。」

ツ「どっ……………どうも……………」

ザザツという音と共に、皆が茂みの中から現れる。

サ「……しかし、まさか尾行してくるとは思いもしなかったぜ。」

海「それを察知したサファもすごいと思うけどね……………」

サ「だからバレバレなんだっての。気配隠し切れてねーし。で……何で尾行してたの？」

サファイアは五人に質問する。

ツ「じ、実は……………」

純「サファちゃんが『特別国際科』について教えてくれないから、尾行すればなんか判るんじゃないかなっておもったの。」

山「そういうことなのな。」

サ「ハア！？……………そんなくだらない事で俺を尾行してたの？」

サファイアは呆れながら言う。

獄「くだらねー事だと！！元々テメエが教えねーからこういう事や
ってんだよ！！！！」

サ「教えたくねーよ。そう秘密をやすやすと教える馬鹿が何処にい
るってんだ。」

獄「だから俺達はその秘密が知りてーんだよ！！教えろ！！」

サ「絶対嫌だ。……しかし、まあ、そんなに知りてーなら直接本人
達に聞けばいい話だろ。案内位ならしてやるよ。」

五人

「！！！！！！！！」

ツ「えっ！！……ってことはもしかして……」

サ「ああ。『特別国際科』の校舎に案内してやるよ。どーせ五時間
目は自習だし。減るもんじゃねーからな。……ついて来い。」

~~~~~

キイイイインツ！！！！！！

アーウィンが父親の攻撃を何とか防いだ。

父「（クッ！！これも防いだとは……！！）」

香苗父は驚いていた。

……実をいうと、アーウィンはさっきから一度も反撃をして来ないのだ。

いくら攻撃を仕掛けても、その度に防がれている。

父「（……………こいつ…強い…！）」

……香苗父はそう感じていた。

なぜならアーウィンは焦る様子もなく、息切れすらなく戦闘をしていたからだ。

父「チツ!!」

キイイインツ!!

香苗父は間合いを取る。

父「ハアツ……ハアツ……」

香苗父はかなりの疲労が出ていた。

そしてアーウィンは……

ア「……これで決める。」

クロスを槍から大鎌に形状を変え、反撃に出た。

父「……………」

…香苗父は急いで回避しようとするが、動けない。

父「(…)…しまった!!…さっきの反動が来てしまった!!」

アーウィン は香苗父に大鎌を振り下ろす。



父「（もう終わりか……！）！」

香苗父は目をギョッとつむる。

しかし……

父」………?」

香苗父は目を開けて見た。

そこには大鎌の姿は無く、  
アーウィンの手には元に戻したクロスが  
握り絞められていた。

ア」……終了です。」

~~~~~

サファイア達が裏庭についたのは、決着がついた二分後位だった。

ツ「エエッ！？一体何があったの！！！」

……裏庭は戦闘の後でかなり荒れていた。

山「スゲエ……手裏剣とか散乱してるぜ。」

ついでに言っとくが、香苗達は既にその場から去っていた。

六人

「……………」

無言になる一同。

サ「……………やっぱり案内するのやーめた。」

五人

「エエッ！……!?!?」

突然の発言に驚く五人。

獄「ハア！？テメエふざけんな！！！！」

サ「だって……なんか裏庭見たら行く気無くしたあー。」

獄「行く気無くすな！！」

サ「んじゃ、教室に帰るわ。」

獄「帰んな！！」

……そして、サファイア達はその場を去った。

~~~~~

（下校）

香「あーあ、お父さんのせいでお弁当がだいなしになったなあ……」

…」

ア「まさか襲撃してくるとは思わなかったよな。」

帰り道、香苗とアーウィンと話ながら帰っていた。

香「手裏剣とかそのままにして来ちゃったけど……大丈夫かしら？」

ア「気にするな。大丈夫だろ。」

香「でも………」

ハア……。とアーウィンは溜息をつく。

ア「つーか、お前もはた迷惑な事すんなよ。」

香「……迷惑かけてない。」

ア「ふざけんな。今回の家出はお前が悪い。」

アーウィンはきっぱりと言う。

香「だってお父さんが急に言い出してきたんだもん！『今度親戚一同で集まって、お前の結婚相手を決めてやる』って！！余計なお世話だつての！！」

ア「……声、デケエよ。」

つまり今回の家出騒動は、その父親の言動がきっかけで喧嘩に発展してしまっただけということだ。

香「でも私は……私……は……  
／／／／／

香苗は顔を真っ赤に染める。

…その様子を見たアーウィンはこう言った。

ア「安心しろ。もしそんな相手が決められたとしても、俺のところに家出して来い。……それくらいの根性はあるだろ。」

自分の言った言葉に恥ずかしさを覚えながらも、香苗の肩をそっと自分の方へ寄せる。

香「……………」



…香苗はビククリしてアーウィンの顔を見た。

ア「／／／／／／／／／／／／／／／／」

アーウィンも顔を真っ赤に染めていた。

香苗はそんなアーウィンを見て、少し嬉しそうに微笑んだ。

おまけ。

アーウインの住むアパートに帰った二人。

？「ああ、やっと帰って来たか二人共。」

そこには、香苗の父親がいた。

香「なっ…何で居んのお父さん！！っーか何で入れたの！！」

父「そいつ（アーウイン）の両親からこのアパートに住んでいると聞いてな。合鍵も借りたんだ。」

チャリ。っと鍵を見せる香苗父。

香「だからそうじゃ無くて何で此処に居るのかって話！！」

父「決まっておるだろ。……将来滝下家を継ぐお前と、その旦那になる息子の顔を見に。」

二人

「!!!!!!!!!!!!!!」

きつぱりと言う香苗父に驚く二人。

ア「えっ………て、事はまさか………」

父「さっきの決闘で感服した。アーウィン、お前は強い。あの精神力にはとても参ったよ。昔から香苗を大切に思ってくれているのも知っている。……約束した通り、香苗をどうかよろしくな。」

そう言って、香苗父は座礼をする。

香「はあ！？ちょっと待ってまだ私達みせいッ」ア「こちらこそよろしくお願ひいたします。」「………ってちょっと！？ウィンも何やってんのよ……！」

アーウィンもその場で座礼をしていた。

父「あ、ワシの事『お義父さん』と呼んでいいからな。」

ア「わかりました。俺の方も『ウィン』と呼んで下さい。」

香「って何さらに話を進めてんの！？止めてよ！！今すぐ止めて！！ストップ！！ストップ！！」

話を進めていく二人に対して香苗は慌てて止めに入る。

父「何言ってるんだ。挨拶することは当然の事だろ。」

香「挨拶にしてはまだ早過ぎじゃボケエ！！私達まだ未成年なんだよ！！結婚していい歳にもなってないんだよ！！そこ分かってるの！！」

…たしかに、まだ早過ぎる。

父「じゃあ……しばらくはワシ公認の香苗の彼氏という事でいいかな。後でウインの両親にも話しておくから。」

ア「いえいえお義父さん。俺の方から伝えときます。」

香「何さらりと呼び方使い合ってるの！？いい加減にしてよっ！！」

香苗はまた止めに入る。

父「二人が結婚適齢期になったら、正式に婚約者ということにしよう。」

ア「ありがとうございます。お義父さん。」

……しかし、二人は真剣に話し合いをしていた。

香「（ブチッ！）……もういい！！帰る！！自分の家に帰るっっっっ

「うううううう……！」

そんな香苗の絶叫が、アパート内をこだました。

第七話「出てってやるう!」四月下旬。ある日の出来事（後編）。（後書き）

今回はアーウィン君の高等部生活を書こうと思います。

更新遅れて本当に申し訳ありませんでした。

2011年3月17日。

小説を編集&一部改編致しました。

閑話1「サファイアとの休日」前編

四月のある日曜日……。

サファイアと海人は、『虹ヶ丘自然公園』という、緑豊かな公園に  
来ていた。

サ「うん……風がかなり気持ちいなあ」

サファイアは、その公園の中にある原っぱでゴロンと、ねころが  
っている。

(ビニールシートをちゃんと下に敷いています。)

海「確かに……こんなに爽やかな風感じたの久々だよ。……今日は



天気もいいし、最高だね。」

その隣に海人は座り、空を見上げていた。

暖かく優しい陽気とふわりと舞う風が、二人を包み込む。

サ「……………とつてもあつたかいなあ……………」

海「……………そうだね……………」

……………二人に暫しの沈黙が訪れる。

そして、5分位たった頃……。

サ「……なあ海人、なんか……眠たくなってこねえか………?」

サファイアはそう言つと、ふああ……。とあくびをする。

海「……うん。そうだね。」

海人はサファイアの言葉を聞いて、少し納得する。

海「……こんなにポカポカで気持ちいい陽気だったら、すぐ寝れそうだよ。」

海人は再び空を見上げながら、少し笑った。

サ「そっぴやさ……」眠い『……』っていう単語で思い出したんだけどよ。……『羊を数えて眠る』って方法、有るよな……」

サファイアはボソリと言う。

海「……ああ。確かあったよね。『羊が一匹……羊が二匹……』って数えて寝る方法。」

海人は思い出して言う。

サ「……前に一回、やってもらった事があるんだ。」

海「……え？誰に？」

意外だなあ。と思いつつ、海人は尋ねる。

サ「……知り合いの兄さん。質実剛健って感じで、真面目でいい人なんだ。兄弟がいて、その人も根は真面目でいい人なんだ。……不憫だけど。」

海「（………なんか凄そうな人達だな。）」

海人は少し驚く。

サ「んでよ……俺、小三の夏休みにその兄さんの家に……確か……二  
三日だったかな？泊まった事があったな。」

海「……………それで？」

海人は聞き返す。

サ「……………泊まって最初の夜だったかな。……………あんまり寝られなく  
て、頼んで、やってもらったんだ。」

海「……………へえ……………」

海人は静かに相槌を打つ。

サ「けどよ……………その兄さんの数え方がまたスツゴくてよ……………何つ  
ーかこう……………ヤバかったぜ、アレは……………」

海「？……………どんな数え方だったの？」

……………苦い顔をして言うサファイアに、海人は聞き返した。

サ「……………羊を点呼して数えてたな。どっかの軍隊で訓練している様な感じで。」

海「……………え？」

サファイアの言葉に、海人は間抜けな声を出す。

海「(ぐ…軍隊…?羊…??点呼…???)」

…海人は全く想像できなかった。というよりも、疑問に駆られていた。

海「……ゴメン、もう一度……リピートプリーズ。」

頭の整理が出来ず、もう一度サファイアに聞き返す海人。

サ「……だから、羊を点呼して数えていたんだよ。…教官が部下を号令の指示を出している感じで。」

海「……………」

海人は絶句した。

……確かに数えてるけど、ある意味ちがう……………

サ「……アレ聞いてたら、むしろギンギンに目え冴えちゃってさ……  
……んでよ、その兄さんに『眠る気はあるのか』って逆に怒られた。  
……畜生、あのムキムキ……………」

海「……そ…そう……だったんだ……………（てか、その人ムキムキだったんだ……………」



海人はこう思った。

……それ絶対、その兄さんのせい……

サ「……でもな、その兄さんに『軍隊じゃないんだから、普通に数えてほしい』って、きっぱり言ったんだ。……そしたら『スマン、つい……』って謝ってきてさ……何か、前にもこういう事あったらしくて……今度はゆっくり数えてもらったんだ。……んで、何とか無事に寝れたな……」

海「……よかったね……」

……本当によかったのか……？

サ「……………なあ、海人。」

海「……………何？」

サファイアの呼びかけに、海人は返す。

サ「……………羊を、数えてほしいんだ……………」

海「え……………何で？」

海人はサファイアに聞く。

サ「実を言つとよ……それ以来、羊を数えずにちゃんと寝ようと努力したんだ……次の日、リビングで沢山の本を読みながら羊を頑張つて数えていた兄さんを……見てしまつてな……」次は、ちゃんと数えられるように練習』していたらしい……」

海「……………」

海人は再び絶句した。

……………何故、普通に数えない……………」

サ「…………でもな、あの時のことを思い返してみると……その兄さんは、一生懸命俺を寝かせようとしてくれてたんだ。…………そういうの、苦手みたいだったけど。」

海「……………」

海人は、静かにサファイアの言う言葉に耳を傾けている。

サ「……けど、こつ思い返してみると……懐かしくつてな。今、無性に羊を数えるの聞きてえんだよ……あの時みたいに。」

海「……………」

……大人に成りきれず、素直に甘えきれない子供みたいだなあ。と、海人は思った。

……それを象徴するかのように、サファイアの姿は何処か寂しさを感じさせていた。

海「……………そっか。」

海人はそんなサファイアの姿を見て、ただ一言返した。

海「点呼風で数える？」

サ「……いや、普通で頼む。」

~~~~~

別の場所では……

？「ハックション！！」

金髪で、前髪をオールバックにしている男がくしゃみをしていた。

男「ハックションー!!……うう……」
? 「どうしたーヴェスト。風邪でもひいたか？」

リビングのソファでくつろいでいる、銀髪の男が声をかける。

男「……体調管理はしっかりしている方だと、前にも言ったはずだが? 兄さん。」

ヴェストと呼ばれた金髪の男は、その兄である銀髪の男に答える。

兄「でもよー。お前最近、また徹夜で仕事してるだろ。…前にもこ
ういう事あったよな?」

弟「……確かに、あったな。」

弟は、兄に答える。

兄「……無理のしすぎは良くないぜ。今日は早めに休んだ方がいい
ぞ。んで、体調を整える。」

弟「……ああ。そうする事にしよう。」

兄の言葉に、弟は応える。

兄「で、ヴェスト。」

弟「…今度はなんだ、兄さん。」

ぐ~~~~きゅるるる.....

兄のお腹が、元気に音をたてる。

兄「……飯、まだ??」

兄は、困った様に笑いながら弟に言う。

弟「もうこんな時間か……今作ってやるから、待ってる兄さん。」

弟は時計を見て言った後、キッチンに向かった。

~~~~~

海「羊が21匹……羊が22匹……羊が23匹……」

海人は空を見ながら羊を数えていた。

海「羊が26匹……羊が……あれ？」



海人はサファイアの方をチラッと見た。

サ「ZZZZ……ZZZZ……」

……サファイアは、気持ち良さそうに寝息をたてて眠っていた。

海「……寝ちゃったか……」

そんなサファイアを見て、安心する海人。

海「……ホントに仕方ない奴だな……」

海人はそう言うと、自分の着ていた上着を脱いで、サファイアに掛ける。

海「（こんな大人しそうな顔して、中身が凶暴……末恐ろしいっつーの。……でも、そんなギャップが良いところなのかもしれないな……サファって。」

海人はそう思いつつサファイアを見ていたが、ふと思い出す。

海「（そういえば……初めてサファイアに出会った時も、今日みたいな天気だったっけ……）」

…海人はサファイアと初めて出会った時の事を思い出すが……

この話は、また次の時に……。



閑話1「サファイアとの休日」前編（後書き）

いまさらながら、あけましておめでと〜ございます!~!

アケザキです!

本来ならここで第八話を載せるつもりだったのですが・・・打つのがちょっと遅れそうなので、先にこっちをアップさせていただきました。

サ「あー、要するにまだ打ってる途中なのか・・・。」

ア「・・・俺の話、いつアップできるんだ?」

遅くても、来週辺りになりそうかなあ・・・。

ア「・・・何とかなりそうなのか?」

大丈夫。グダグダになるとは思いますが・・・。

ア「つまり、いつも通りってわけか。」

・・・まあ何とかなるさ。

サ「そーいや、今回の閑話で新キャラ・・・ってか兄さん達出てきたよな？・・・次出て来るのいつ？」

・・・もうちょい後かな。長編にする予定だから。

ちなみに今回の話のネタ元になったのは、『羊でお休みシリーズ』のCD。早速買って聴いたら面白かったもんで、ネタにしてみました。

このあとの話にも絡んで来る人達だから、しっかり出しとかないといけないので。

サ「・・・会えるのか？」

もちろん。

ア「でも、しばらくの辛抱が必要だ？」

そういついとは。

サ「ならいーやー!!」

とりあえず、次回は本編を頑張つてアップします!!  
なるべく早く投稿出来るようにしますんで、よろしくお願いします  
!!

そしてこの度、『PVアクセス』が10000件を突破しました!!

サ「『ユニーク』の方は2000件突破だっけ?確か。」  
ア「・・・でも凄いな。こんなに見てくれている人達がいっぱい  
て。」

これも、皆様からの応援があつてこそこの事です!!ありがとうございます!!  
います!!

サ「でも、相変わらず感想の欄は一件も来て無いんだよな。一応誰  
でも感想は書ける様にしてあるみたいだけど。」  
ア「痛くねーか?むしろ。」

うっ!!・・・でも何とかここまで連載出来たんだよ!!最初の話  
アップした後にアクセス件数見たら、本当に嬉しかったんだよ!!  
感想が全く来なかったけど、アクセスが10000件突破したとき  
はもう・・・その場で叫びたいぐらい嬉しかったんだから!!

二人

「あー、そうかいそうかい。」

・・・酷い。酷すぎる・・・この二人・・・。

サ「だって俺らSだもん。」

ア「ああ、そうだ。」

・・・まあそんな二人はさておき、これからも『虹ヶ丘』を改めてよろしくお願いします!!

それではっ!!

2011年3月18日。

小説を編集&一部改編、及び前書きを削除致しました。

第八話「(……えー！?)」四月下旬。面接試験は波瀾万丈。(前書き)

遅れて申し訳ありませんでした!!

第八話、行きます!!



第八話「……………えー！？」四月下旬。面接試験は波瀾万丈。

- 高等部・一年E組教室内 -

？「なあ。今日一緒にナンパでもしに行かね？」

…ある日の放課後。茶髪の男子が、同じクラスの男子に声をかける。

？「……………何故俺がナンパしに行かないといけないんだよ。紀田。」

茶髪男子、きだまほのみ紀田正臣は軽いノリで男子生徒に言う。

正「もちろん！お前みたいな超イケメンで背の高い奴と一緒にいれば、道行く女子達からのアツツイ逆ナン狙えるからに決まってるー？」

？「……動機が不純過ぎだろうが。」

……本当に不純過ぎる。

正「いいだろ別にい。……ハッ！それともお前ってまさかホモエロジャンルなあつち系……」  
？「…俺に、そんな趣味は無い。」

きつぱりと言う男子生徒。

正「じゃあOK！ナンパで女をゲットしまくりで楽しK…？」  
他の奴らをあたってくれ。それじゃ。」

そう言って男子生徒は帰ろうとしたが……

ガシッ！！

……正臣に腕を掴まれる。

？「……頼む、放してくれ。」

正「そういう訳にもいかないんだって！！コッチは女が懸かっているんだ！！だから一緒にナンパしにいらせアーウィン！！！！」

男子生徒……アーウィン、正臣の必死な頼みにかなり困っていた。

ア「……ホント勘弁してくれ。コツチも今日、バイトの面接試験があるんだ。これ落ちたら俺、死活問題なんだよ。……後、俺には彼女いるし。」

正「マジで！？つか彼女いたの!？」

アーウィンの言った言葉に正臣は驚く。

ア「……そんなに驚く事でも無いだろ。つか、驚き過ぎだ。」

正「いやマジ驚きだつて!!あのクールでイケメンでちょっぴりSな雰囲気漂わせてる、女子に大人気のアーウィン君に彼女がいたんだぞ!!!」

ア「褒めてんのかそれ。」

正臣の言葉につっこむアーウィン。

正「で、どんな感じの子？……年下？同学年？上級生？それとも大人の女？」

正臣はノリノリでアーウィンに尋ねる。

ア「……年下。こここの中等部に在学している。」

そんな正臣を見て一発殴ってやろうかと思ったアーウィンだったが、何とか思い留まって答える。

正「こここの中等部！？かなりの数の美女が揃ってるとこじゃんか！  
！」

正臣はさらに驚いた。

？「へえ。俺の妹達も通ってたよ。そこ。」

二人

「!!!!!!!!!!!!!!」

アーウィンと正臣はびっくりして、声のした方向（後ろ）を向く。

正「……何だ、ガーネットかよ。」

声をかけた男子生徒、ガーネット・トゥールヴィオンがそこにいた。

ア「……いつからそこにいたんだ？隣のクラスだろ。お前。」

ガ「久々にアーウィンと一緒に帰ろうかなあって思ってた来たら、二人がそこで話してたの。……で紀田あ、ちょっといいかな……？」

そう言うと、ガーネットはガシツと正臣の両肩を掴む。

ガ「まさかだとは思うが……その中等部に俺の大事な大事な妹達がいる事を知りながら……手えだそうとしてんじゃねえだろうなあ……！！」

……そして、置いた手に力を込め始める。

正「痛い痛い痛い！ガーネット！！マジ痛い！手に力入り過ぎ！！つか怖い！！目がマジ笑って無い！！そしてお前に妹がいたのは初耳なんだけど！！」

正臣が悲鳴をあげる。しかし、肝心のガーネットは……

ガ「妹に……妹に……妹にい……！！！」

……手の力を一層強くして、正臣を苦しめていた。

「ここで補足させてもらいます」

既に皆さんがお察しの通りなのですが、ガーネットはこの小説の主人公の一人、サファイア・トゥールヴィオンの実の兄でございます。



トウルヴィオン四姉弟の二番目にして長男。かなりマイペースな性格で、科学が大好き。そして下の妹達を凄く可愛がっているのです（むしろ溺愛）

ちなみに、サファイアからは『変態マッド兄貴』と呼ばれ、とつても嫌がられています。

「それでは引き続き、本編をお楽しみください」

ア「ガーネット。そのまま紀田を抑え込んでくれ。……妹によるしかな。それじゃ。」

正「あゝっ！待ってくれ！！助けてアーウィン！！！！」

正臣の悲痛なる叫びに対し、アーウィンは無情にもそそくさと教室

を出て行ってしまった。

その後の正臣がどうなったか、皆さんの御想像にお任せいたします。

~~~~~

・廊下・

ア「（面接は6時からだし……何とか間に合うかな……）」

アーウィンにとって、今日は大事な日。さっきも言っていた通り、バイトの面接試験があるからだ。

ズドドドドドド……

……赤い髪の男が、大声と共にアーウィンの前を全速力で横切って行った。

そして……

？「雄二、待って!!」

その後ろから、女子生徒が猛ダッシュでその男を追い掛けていた。

ア「（あれ？……あの女子って確か……）」

アーウィンは、さつき走り抜けて行った女子生徒の顔に見覚えがあった。

霧島翔子きりしましょうこ……進学進路アドバンテージコース、通称『特進コース』の高等部二年生の生徒だ。

学園きつての秀才で、『特進コース』の中ではトップの成績を誇っているという。正に才女の生徒。

しかし……

ア「(……何で追いかけてこんなにかしてるんだ???)」

アーウィンの頭の中は、疑問でいっぱいになっていた。

というのも……『霧島翔子は、男子生徒に全く興味が無い』という噂がたつほど、異性に見向きもしない事で有名であるため、男子生

徒を追いかけてまわす事等は、まず無いと思うのだが……………。

ア「(ま、どーせ何かちょっとかいでも出されたんだろう。)」

アーウィンは、気にしない事にした。

- 教室 -

しばらくして、アーウィンは忘れ物をしたことに気づき、また教室に戻って来ていた。

ア「(やれやれ…大事な日に忘れ物をするとは……………)」

…何を忘れたの、アーウィン君？

ア「体育着。しかも汗をいっぱいかいた使用済の。……今日持って帰らないと、臭くなる。明日は休校で誰もいないし取りに帰れない。どうしよう。」

…いやどうしようじゃねーよ。持って帰れよ。そして洗濯をしろ。

ア「……だから今、取りに来ている。」

……あーそうかい。

まあそれはいいとして、アーウィンは自分の机の横に掛けてあった体育着の袋を回収した。

その時、

ア「……………!？」

後ろの方から、急に何かの気配を感じた。

……説明し忘れてしまったのだが、今現在この教室には、アーウィン以外誰も居ない状態なのである。

……だがしかし、何かは分からないがいる気配がするのだ。

ア「……………」

アーウィンはキョロキョロと辺りを見回し、気配のする方向を探す。

ア「……………見つけた。」

そして、気配を発している方向……掃除用具のロッカーにアーウィンは向かった。

その手には、万が一の為に『ハーツ・クロス』が握りしめられている。
(武器についてはオリ主説明を参照してください。)

ア「……………」

……………そして、ロッカーの戸を静かに開けた。

ギイイイイ……………

そこには……………！！

？「……………開けないでよ。」

……毛布に包まり、体育座りをしている女子生徒が一人いた。

ア「……………」

……バタンッ！

アーウィンは無言のまま、ロッカーの戸を閉めた。

ア「……糸色先生を呼んで来よう。」

その後アーウィンアールウィンは職員室に行き、ロッカーの中にいた女子生徒、
『小森霧』こもりぎりが所属するクラスの担任――絶b……もとい、糸色望先いとじきのぞむ
生を呼ぼうとしたが、何故か職員室内でネガティブゾーンを発生さ
せていたため近寄る事が出来なかった。

それで他の先生に伝えたところ……

「気にするな、いつもの事だ。」
的な事を言われた為、仕方なく職員室を後にし下校した。

- 町内 -

下校し、アパートに帰った後、アーウィンはバイト予定先のコンビニに向かっていた。

アーウィンがバイト先に選んだのは『大江戸マート』という、何だか『ファ リーマー』みたいなカラーリングがしてあるコンビニだ。(『ファ リーマー』は関係ございません。あしからず。)

アーウィンの住んでるアパートから10分位のところにある。

しかし……

ア「(……ヤベエ……時間大幅にロスした……!!!)」

時刻は午後5時45分。

……決してアーウインのアパートから学園までの道のりが長かった訳では無い。

実は、アーウインの住んでるアパートから学園までは20分〜30分位の時間で着く。

だが、アーウインは下校している際にもチンピラに絡まれたり、大人気アイドルの『寺門通』がゲリラライブやっていたり（そこで白熱して応援していた地味眼鏡がいたり）、電磁砲に当たりそうになつたり、高等部のゴリラ委員長が吹っ飛ばされて来たり、自販機を投げている男を見かけたり……………。

やっと帰ってこれたのが5時30分を過ぎていたのだ。

……今日に限って、運が悪すぎるだろ。

ア「黙れ、作者。」

……すんげー傷つくんだケド……その言い方。

まあそれはさておき、アーウィンは公園の前を通過する。

コロコロコロコロ……トンッ。

ア「……………」?

アーウィンの足元に何かが転がって来た。

ア「(…………)ボール？」

アーウィンが、転がってきたボールを拾い上げた瞬間。

「ワンッ！……！」

巨大な生物が、アーウィンに襲い掛かってくる……！！

ア「……！！……！！？」

……アーウィンは素早く緊急回避！！

ズドオオオ……ン！！！！

巨大な生物……否、白くて巨大な犬が着地した。

？「定春うゝゝ！！ボール取ったアルか……！！」

そこに、飼い主と思われる少女が来た。

女「定春く〜……あ、ふーちゃん!! どうしたアルか？」

ア「……神楽先輩……………」

~~~~~

女「そうだったアルか〜。ふーちゃんも大変だったアルな。」

さっきの白い巨大な犬……『定春』の飼い主、神楽かぐらとアーウィン  
は、公園で一緒に会話をしていた。

ア「……大変どころじゃ無いですよ。後『ふーちゃん』って呼ぶの  
やめてください。恥ずかしいんで。」

……どうやらアーウィンは、『ふーちゃん』という呼ばれ方が苦手らしい。

神「……バイトアルかあ。ま、『マダオ』みたいにバイト先転々とした奴にはならない様に精々頑張るアルよ。」

ア「……とりあえずそこら辺はわきまえているんで、大丈夫です。てか、『マダオ』って誰ですか？」

神楽との、何だか微妙なトークを繰り広げているアーウィン。

神「ところでふーちゃん。時間大丈夫アルか？面接試験とかいうヤツ。」

ア「……………あ。」

アーウィンは自分の腕時計をみる。

時刻は5時58分。

ア「ヤベっ!?!?……神楽先輩!!自分急ぐんでこれだ!!それじゃ  
!?!?!」

アーウィンは急いで行くところだが……

神「ほうアチョー……っ!?!?!」

バキッ!!

……神楽に背中を蹴られて、阻止されるアーウィン。

ア「あたたたた……何するんですか、神楽先輩……!!」

アーウィンは神楽に抗議する。

神「私なりの喝ヨ!!頑張ってこいアル!!」

ア「!!……ありがとうございます。行ってきます……!!」

アーウィンは立ち上がると、ダッシュでコンビニに向かった。

……ところで神楽ちゃん、今の喝の意味は……?

神「特に無いアル!!私、一度でいいからこーゆーのやってみたかっただけネ!!」

……そうですね。

・コンビニ『大江戸マート』前・

ア「……………えっ？」

……  
神楽と別れた後、アーウィンは何とかコンビニに辿り着いたのだが

ア「……………何でこんな事に……………!?!?」

……アーウィンは中に入るなり、ビックリしていた。

なぜならコンビニの店内がかなり荒らされていて、中でグラサンをかけたオッサンが倒れていた。

その後ろに店長と思われる人が、オッサンの近くにしゃがみこむ。

店「……あなた、今日でクビ。今後一切この店に来なくていいから。」

店長らしき人はオッサンにそう言うが、生憎オッサンは気絶しているらしい。

そして視線を感じたのか、急にアーウィンの方に首を向く。

店「あー……君、新入りの子だね？今日面接の。」

ア「……はい……」

……アーウィンは気まずさを感じながらも、返事をする。

店「面接はもういいから、君、今日から働いて。採用採用。」

ア「(……………えー！?)」

こうして、アーウィンのバイト先は無事に決まったのであった。



第八話「(……えー！?)」四月下旬。面接試験は波瀾万丈。(後書き)

・・・という事でアーウィン君のバイト先も無事に決まりました。

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

お詫び申し上げます。

この話には、まだ続きがありますので、更新できる時に更新したい  
と思います。

アケザキでした。

2011年3月18日。

小説を編集&一部改編致しました。

第八・五話「……すまない。」四月下旬。死神道化と少女。(前書き)

前回の話の続きです。

じいじ。

第八・五話「……すまない。」四月下旬。死神道化と少女。

その日の夜の事……

ボタン。

男は自分の住むアパートに帰ってきた。

そして此処からが………

彼の“夜”が始まる。

- 虹ヶ丘東地区、高層ビル群 -

……星明かりが無い代わりに、怪しく輝く月が支配する漆黒の夜。

空とは対象的に、煌々と明るく照らす街灯が包む都会的なビル群。

……そのビル群の一つの屋上に、一人で立っている者がいる。

……そいつは空と同じ漆黒の布を纏い、頭に道化の帽子を被っていた……

そして顔は道化の化粧みたいな面を付けて……

傍から見れば変な格好をした奴にしか見えない。

……だがそいつの出す“オーラ”は、どこか威圧的なものを感じさせた。

まるで、“闇を支配する孤高の存在”の様に……

「……………」

そいつは空を見ていた。

……しかし空には、不気味に光る月以外何も無い。

「……………」



今度は下の方を見る。

……下は、街灯が燈る明るい大通りになっていた。

「……………」

ジャキツ。

……そいつは静かに大鎌を構えた。

……獲物は、人混みに紛れ込んだ“闇”。

そっり……………

そいつは静かに光の中へ飛び込んだ。

今宵も獲物を刈り取る為に……………

（三日後）

「ねえ！！また“死神道化”が現れたらしいよ！！！」

中等部、三年C組の教室内で騒ぐ生徒達。

「今度は何処で出たんだ？」

「うっそ！？よりもよってウチの近くじゃん！！！」

「おっかね〜……」

「マジヤバくない！？」

「危ない奴なんだろ。そいつ。」

……クラス全体が騒ぐ中、一人の女子生徒は教室を出ていった。

・高等部、一年E組教室・

「……………」

アーウィン は 黙々と読書をしていた。

？「おいアーウィン。」

そこへ正臣がやってくる。

ア「……………何の用だ？紀田。」

アーウィン は顔を上げる事も無く、読書を続けている。

正「なんだよー。せっかくお前にお客が来たっていうのにその態度は。」

ア「……………客？」

アーウィンはようやく正臣に顔を向ける。

正「ほらあの子。扉んところにいるとびつきり麗しい美女。……………ひよっとして昨日話していた彼女？お熱いねえ〜〜。ヒューヒューっ。」

……………正臣の言葉が少々カんに障ったが、アーウィンは教室の引き扉の方を見る。

ア「……………香苗。」

……そこには、香苗がいた。

・屋上・

アーウィンと香苗は屋上に来ていた。

香「……………ねえ。」

ア「……………何だ？」

香「……………あんた、また危ない事やったでしょ。」

ア「……………何がだ？」

香「とぼけないで……!!!!」

香苗はアーウィンに怒る。

香「あんたまた“なんちゃら道化”とか名乗って暴れたでしょ!!  
今度は東地区のビル群で!!」

ア「……“死神道化”だ馬鹿。」

香「私は馬鹿じゃ無い!!」

ますます怒る香苗。

香「……その“死神道化”の話、また噂になってるの!!」  
ア「……そんな噂位聞き流せ。」

香「心配だから言ってるんでしょ!!危険な事ばかりして!!こ  
っちの身にもなってよ!!」

……香苗の目には涙が滲んでいた。



ア「……………すまない。」

香「謝らないでー!!」

ア「……………なら、俺はどっすねばいい?」

ア「ウィンは香苗に尋ねる。」

香「……………次、危ない事やるんなら……………携帯とかあるんだからさ……………連絡位してよ……………っ……………」

滲んでいた涙は、頬を伝ってポタポタと落ちていく。

香「後…私…一応は忍なんだよ…手伝える事があつたら…  
…手伝いたいよ…一緒に…連れて行ってよ…っ…  
…」

…香苗の涙はどんどん溢れ、頬を伝い続ける。

ア「……………分かった。」

アーウィンはそっと香苗を抱きしめた。

ア「……ただし、無茶な事は絶対するな。次から迎えに行くから支度をしとけ。後、訓練は今までの量の倍は鍛える。実戦はキツイかな。」

アーウィンは香苗にそう告げる。

香「……………うん。」

……香苗はそれを了承した。

~~~~~

ア「さて……どうしたもんかな……これ。」

香「……何が？」

香苗はアーウィンに尋ねる。

キーンコーンカーンコーン

ア「チャイムが鳴った。遅刻確定だなこりゃ。」

香「そ…それ先に言ってよ！！ってか『確定』じゃ無くて『決定』でしょーがつー！！！」

香苗はアーウィンに勢いよくツッコんだ。

アーウィン・キアス・ペトルーシユカ

普段は普通の高校生。

だがその裏は、世間を騒がす“死神道化”。

その仕事は『人々に紛れ込んだ“闇”』を回収すること。

……
『人々に紛れ込んだ“闇”』
『とは何か？』

それはまた別の機会に……

第八・五話「……すまない。」四月下旬。死神道化と少女。（後書き）

いやぁ……やっとここまで来たよ。

ア「……何がだ？」

ようやく“死神道化”の設定が出せたんだよおっ!!

ア「そっちな。」

あゝ……ここまで苦労したキャラ本当にいないから。

ア「……だったらこんなややこしい設定にするな。」

香「あのさぁ……作者さん。」

なんだい？カナっち。

香「次、“死神道化”の設定出す時どうすんの？」

ア「・・・アクションシーンとか色々決める事あるよな？」

そこら辺は考えてあるから大丈夫。・・・多分。

香「多分かいいい！」

ア「残酷な描写は入るのか？」

入れない方向で行くよ。できる限り。

ア「了解。」

香「あ、後何か言う事あるんでしょう？作者さん。」

おっと・・・忘れるところだった。

エーと、この度『学園都市虹ヶ丘』に関する質問を募集することになりました！

質問が寄せられ次第、私、アケザキとキャラクター達がお答えいたします！！

ア「要するに質問コーナーを作るのか。」

香「らしいわね・・・。」

これからも『虹ヶ丘』をよろしくお願いいたします！

ご意見、ご感想お待ちしております。

2011年2月24日、編集&一部改編いたしました。

お気に入り登録をされた方、本当にありがとうございます！！

これからも精一杯頑張っていきます！！

閑話2「サファイアとの休日」後編（前書き）

サ「ふいー。食った食った。」

あの後（閑話1参照）。昼寝から目が覚めたサファイアは、海人と一緒に昼飯を食べていた。

海「ごちそうさま。・・・すごく美味しかったよ。」

ちなみに、昼ご飯はサファイアお手製のサンドイッチだ。

サ「・・・まあ、サンドイッチ位は誰でも簡単に作れるっての。」
海「でも本当に美味しかったよ。ありがとう。」

海人はにこつと笑う。

サ「（うわぁ・・・マジでチワワみたい。可愛い。）」

そんな海人を見て、サファイアが心の中で感想を述べる。

海「?・・・どーしたのサファ?」

サ「あー、何でも無い何でも無い。・・・あ、そういやさ海人。俺達が初めてあつた日もこんな感じの天気だったよな!!」

サファイアは、さっきの感想を海人に悟られまいと慌てて話題を持つてきた。

海「あ。サファもそう思った?」

サ「まあな。なんせあの時の事は、今でもハッキリと覚えているし。」

海「俺もだよ。」

サ「いやあ、あん時は色々あつたよなあ。」

そんな事をサファイアが言いながら、海人はその時の事を思い出していた。

閑話2「サファイアとの休日」後編。

その日は爽やかな風に、桜の花吹雪が舞う晴れ空だった。

- 中高等学校舎敷地内・講堂 -

俺は、この虹ヶ丘学園に入学した。

最初は違う中学に行こうかなと迷ったけど、この虹ヶ丘学園は凄く学校行事や部活動が盛んで、落ち着いた環境のなかで伸び伸びと勉強することが出来るから入学した。

それに高等部は自動エスカレーター式で上がれるし、成績次第では特待生として大学部に入学も。これは俺にとって魅力的な事だった

のも理由の一つ。

まあ、『魔法学科』とか『特別国際科』とか名前からして怪しい学科があっただけだね……。

そんな感じで、俺は期待に胸を膨らませながら入学式の式辞を聞いていた。

- 中高等部校舎敷地内・裏庭 -

海「うわぁ……!! すっごい綺麗だなぁ……!!」

入学式が終わり、俺は両親と別れてこの校舎を探索していた。

広い校舎の中を色々と見て周りながら、俺はこの裏庭にたどり着いた。

とても綺麗だった。

色とりどりの花が咲き乱れ、植わっている木々は鮮やかな緑の若葉を風になびかせている。

あまりにも幻想的な感じがして、まるで別世界に来た感じがする。。。

海「この裏庭も校舎なんだよね。。。？。。。それにしても凄いなあ。。。。」

俺は裏庭をキヨロキヨロと見ながら進んで行く。

海「（誰が整備しているんだろう・・・？）」

そして、広場になっているスペースに着く。

海「（あ、人がいる・・・！！）」

その広場のベンチには、一人の人が座って本を読んでいた。

海「（女の子だ・・・。）」

肩までのロング。

ふわりと風になびく明るいブラウンの髪。

おっとりとした表情。

スツゴク美人・・・。

海」・・・・・・・・・・」

俺の心臓は、早鐘を打つように鳴っていた。

すると俺の視線に気づいたのか、読んでいた本を閉じてスッと立ち、俺に近づいてきた。

海「!?!」

俺はどうしようか迷ったが、答えを出す前に女の子が超不機嫌そうな顔で俺の前に来た。

女「・・・おい、お前何で俺の事じろじろ見てんだよ。新手のストーカーか？」

海「ち……違つよ!！」

……見た目に反して口が相当悪っ!!!

女「ふーん……。」「

……女の子は俺の顔をかなり睨んでいる……というより、ガンを飛ばしている!?!しかも威圧感バリバリだ!?!恐えええ!?!!

海「(や……ヤベエツ!!ひよっとしてヤンキーとかかつ……!?!こんな可愛い子なのに!?!ヤバい!!!だとしたらこれは相当ヤバい!!!逃げるべきか!?!これは逃げるべきか!?!)(「

恐怖に駆られながらも、この場をどう打開すべきか俺はマッハで考えた。

だが……。

女「悪かったな、ヤンキーとかみたいだよ……!!!!!!」
海「えっ!!!!ふええええっ!!!!?」

……しまった!!!どうやら声に出ているらしい……!!!

……つか女の子の声って、こんなものすごくドスの効いた声だったっけ!!!!?」

女「・・・おい。」
海「は・・・はいつ・・・!？」

女の子は俺を威圧しながらガツチリと両肩を掴む。

女「お前、今俺の事を“可愛い”って言ったよな・・・？」
海「・・・ま・・・まあ・・・。」

・・・じ・・・事実だし・・・。

海「すっ・・・スツゴク美人で・・・か・・・可愛いなあって・・・」
!..!..」

今の鬼みたいな表情は除くけどっ……!!

そう心の中で叫びつつ、俺は恐怖でガクガクブルブル震えながらもありのままの事を言った。

女「……………」

女の子は無言になった。

海「…………ヤバい!!俺もしかして地雷踏んだ!?!」

そう思った瞬間、女の子は両肩を掴んでいた手に力を込めた。

海「!!!!!!!!!!?」

殺られる!!!!!!!!!!そう思ったときだった。

女「やったあああああああああああつ!!!!!!!!!!」

女の子は辺り一面に響き渡る声で叫んだ。

女「ついにやったぜ俺っ！！」「男」と言われ続けた10年間が嘘みたいに見えるっ！！俺は今！！華麗なる中学生デビューを果たしたのだああああっ！！！！！！」

・・・女の子は狂喜乱舞して、俺の肩をガツクンガツクンと揺らす。

海人は超ブルーになっていた。

サ「おいチワワ。何かあったか？」

サファイアは海人に声をかける。

海「だからチワワじゃ無いって!!」

海人は真っ向から否定に入る。

サ「何だよーっ。お前スツゴクネガティブになったから、俺心配して声かけてやっただけなのにい。」

ムスーっ。とするサファイア。

海「・・・あのね、声かける分にはいいんだよ。でもその“あだ名”で呼ばれるのはちょっと止めてほしい。」

海人はキツパリと言った。

サ「……………わかったよ。」

サファイアも渋々了承する。

「……………じゃあそのかわり、今度から『ラブリーチワワ・海人君』
って呼んでやる。」

海「……………って悪化してんじゃねーかつ！！！！！」

……………そんな盛大なる漫才が、『虹ヶ丘自然公園』中に響いた。

その後、サファイアと海人は『虹ヶ丘自然公園』で自然をたっぷりと満喫した。

『自然公園』の中で吹く風は爽やかで優しく木々を揺らし、陽射しは包み込むように暖かかったらしい。

~~~~~

く帰り道く

サ「ハア……。やっぱり自然に触れ合っつていいなあ。」  
海「そうだね。リフレッシュには最高だったよ。」

他愛のない会話をしつつ、家路につく二人。

サ「なあ、海人。」

海「何？」

サ「……。また、一緒に出かけような。」

海「……。そうだね。」

沈んでいく夕日はただ静かに、二人を見守っていた。

閑話2「サファイアとの休日」後編（後書き）

こんばんは。

アケザキです。

今回の閑話いかがだったでしょうか？

この閑話を最後に、『虹ヶ丘』は次の章へ移りたいと思います。

海「えっ！？この小説に『章』ってあったの！？初耳なんだけど！」

あるよ。ほら『始業式』とか『四月下旬』とか。アレだよ。  
アレが『章』の代わりをしているんだよ。  
私、ケータイOnlyで打ってるから『章機能』が使えないんだ・・・。

サ「マジでか。」

まーそれはさておき、  
此処から月をめぐり、『五月編』を始めさせていただきます。

最初は、五月の始めという事で『GW』から。

サ「随分と急だな。」

海「仕方ないよ。物語の関係上。」

これから『虹ヶ丘』をよろしくお願いいたします!!

サ「ご意見、ご感想等よろしく願います!!」

海「質問の方もよろしく願います!!」

登場キャラクターまとめ集（第六話）閑話2まで（前書き）

キリがいいので、今回はまとめ集パート2です。

それではごーぞうー！



## 登場キャラクターまとめ集（第六話～閑話2まで）

閑話1から登場

ヴェスト（仮名）

・登場作品：????

・金髪で、前髪をオールバックにしている。

・サファイア曰く、質実剛健な人。

・兄がいる。

私、アケザキの好きなキャラクターの内の一人です。

前に出てきた『フェリ兄さん』と共に再登場する予定です。

……多分。

ヴェストの兄（仮名）

・登場作品：????

・ヴェスト（仮）の兄さん。

・銀髪（ていうか、アルビノと言う髪の色）

・サファイア曰く、根は質実剛健らしい。

・不憫。

この人も弟さん同様、再登場が『フェリ兄さん』と一緒になると思

います。  
個人的にもっと活躍させたいキャラです。

### 第八話から登場

紀田 正臣（高等部 一年E組在籍生徒）

・登場作品：デュラララ！！

- ・高校一年生。
- ・ナンパ好き。
- ・カラーギャング『黄巾族』の元リーダー。

正臣に関しては、このあともちよくちよく出す予定です。  
他の『デュラララ！！』キャラも何人か出します。

霧島 翔子（高等部 『特進コース』二年生）

・登場作品：バカとテストと召喚獣

- ・学園きつての秀才。
- ・トップクラスの成績を誇っている。
- ・男子に興味が無いという噂がたっているが・・・

『バカテスト』からはこの人を出しました。

登場場面は主人公でも良かったんですけど、こっちの方がこれからの展開が面白くなりそうだったので。

小森 霧（高等部二年生）

・登場作品：さよなら絶望先生

・不校少女。

・担任の糸色先生が好き。

・元々は不登校生徒だった。

『絶望先生』の中で一番好きなキャラです。

可愛いですよね！！

これからちよくちよく出るキャラになります。

糸色 望（現代国語担当教師）

・登場作品：さよなら絶望先生

・超ネガティブ教師。

・自分の名前の字画が良くないことを気にしている。

・名前を横書きで（しかもくっつけて）書くと「絶望」と読めてしまふ。

・「旅立ちセット」という怪しいスーツケースを所持している。

とりあえずハッ橋を二〜三枚くるんだ説明にしましたが・・・この

人一言も喋ってねーな……。  
まあ、次に出すときは何とか動かせる様にします。

神楽（高等部三年生）

- ・登場作品：銀魂（三年乙組銀八先生より）
- ・宇宙戦闘種族『夜兎』の少女。
- ・大食い。
- ・定春というデカイ犬を飼っている。
- ・身体能力が高い。
- ・『銀八先生』では中国からの留学生設定がある。

神楽ちゃんは基本的ポケ役です。

運動神経もいいのもっとその路線で活躍させたいです。  
あと、サファイアとマブタチ設定あり。

コンビニをクビにされたオッサン（仮名）

- ・登場作品：?????
- ・アーウィンが面接試験を受けようとしたコンビニの、アルバイト  
店員。
- ・何故か登場シーンにてクビにされていた。

・・・言わずと知れたあいつ、『マダオ』です。

「このあとの話でも出す予定ですが・・・どうしようかな・・・。」

登場キャラクターまとめ集（第六話）閑話2まで（後書き）

『さよなら絶望先生』のキャラは、この先も出てくる予定です。

それと、この小説を二週間にわたって編集作業を行っていきたいと思います。

次話につきましては、編集作業が終わり次第投稿させていただきます。

アケザキでした。

第九話「それが僕だから。」GW。休日の公園で。（前書き）

第九話です。

後半、むっちゃグダグダなのでご注意ください……。。

第九話「それが僕だから。」GW。休日の公園で。

季節は巡り、五月――。

-公園-

純「……………今日は何を描こうかな？」

純は、近所の公園に来ていた。

……………一冊のスケッチブックを持って。



~~~~~

海人とツナは、おしゃべりしながら歩いていた。

海「それでさ、ウチの母さんがコケちゃって、鍋の中にあつたカレー全部こぼしちゃったんだ。」

ツ「え！全部！？」

海「そう。全部。いやーマジでびっくりしたよ。あのあとキッチンの床を掃除したんだけどさ、床がカレー臭くなっちゃって大変だったし。」

ツ「……それは大変だったね。その後、夕飯どうし……アレ？」

突然止まるツナ。

海「……どうしたの？沢田君。」

ツ「あれ……公園にいるの黒崎君だよな？」

海「え？」

ツナが向く視線の先……そこには純がいた。

海「あ、ホントだ。純がいる。」

純は、公園で木の上を眺めていたり、誰もいないベンチの下を覗き込んでいたりしている。

ツ「何をしているんだろ？」

海「探し物している……とか、かな？」

ツ「それにしても……不自然、だよな。」

海「……そうだね。」

怪しげな行動をする純を見る二人。

？「そんなところで何してんだ？」

二人

「ウワツッ！！？」

突然、背後から声をかけられ驚くツナ達。

海「な……なんだ、百目鬼先輩でしたか。」

ツ「び、ビックリした……。」

……声をかけてきたのは、高等部二年生の百目鬼ひゃくめく鬼静だった。
学校に用事があるのか、制服に身を包んでいる。

百「そんなところに突っ立っていると、通行人の邪魔になるぞ。」

海「あ！すみません！……」

ツ「ごめんなさい！……」

二人は百目鬼に謝る。

百「まあそれはいいとして、何してんだお前ら。」

海「えーっと……実は、その……なんていうか……」

海人は百目鬼に事情を話そうとした時。

純「あれ？何してるのみんな？」

純が海人達のところに来た。

純「で、関根達は黒崎を見ていたのか。」

ツ「はい。」

海「そういう事になりますね。」

その後、立ち話もするのも難だったので、海人達は公園のベンチに座って話していた。

純「ごめんね、そんなに怪しかったかな？僕……」

ちなみに、純は趣味のスケッチをするため公園に足を運び、対象にするものを探していたらしい。

ツ「あ、別に謝るほどじゃないと思うよ。」

海「そうだよ。それに、俺だって自分じゃ気づかないけど、変な行動しているかもしれないし。」

純のフォローに入る二人。

百「ま、そういう時もあるだろうな。」

百目鬼はサラッと言う。

海「そういえば、純って絵とか本当に好きだよな。……何でそんなに好きなの？」

海人は、純に質問をする。

純「そっだなあ……何となくだけど、『楽しい』からかなあ。」

純がそう答える。

純「ほら、好きな事すると『楽しい』とか『面白い』とか色々思う時があるでしょ？あれと一緒にだよ。絵を描いていたり、スケッチしているとか、どういう絵を描こうかになって想像するのが楽しかったりするし。色を塗る時とか、ここを重ねて塗ってみたら面白いかなあって思ったりするし。後は……」

純はにっこりと笑って、こう言った。

純「絵を描く事で、もっともっと自分を表現したいなって思うからかな。」

ツ「自分を表現する？絵を描く事で？」

ツナは純に尋ねる。

純「そうだよ。絵は自分を表現することもできるんだよ。自分の気持ちや、感じた事まで全部。」

純はこうつぶけた。

純「絵を描くその時その時で、微妙に違ってくるんだよ。絵のタッチとか、色使いと。勿論その日の気持ちとかでもね。……それでよくこう感じるんだ。『絵には自分が出る』って。」

だからかな……と純は空を見ながらこう言った。

純「もっともっと、自分を知ってもらいたい。自分は今こうなんですって伝えたい。そう思うんだよね。」

空を見上げる純の目は、キラキラと輝いていた。

純「あ、それにね。他の人の絵を見ると、その人自身が見えてく

る……そう思うんだよ。多分。」

二人

「ってそこは『多分』なの!?!」

海人とツナは盛大につっこむ。

純「えー、だってあんまり自信無いんだもん。」

ツ「いや『自信無いんだもん』じゃないって!?!」

海「折角良い話みたいな雰囲気になつてたのに!?!」

何で自分で作った雰囲気を自分でぶち壊しちゃうのかなあ……と海人は思った。

百「黒崎。料理にも人柄は出るぞ。作った奴によって、味の好みと分かる。」

海「百目鬼先輩……それ今言う事ですか?」

海人は百目鬼に尋ねるが。

百「さてと……そろそろ学校に行くか。」

百目鬼は立ち上がり、学校に行こうとする。

海「って無視ですか!？」

百「いや……今日、放送部の集まりがあって、それに行かないといけないんでな。」

海「……そうですか。」

海人は仕方ないか……と諦めた。

百「じゃあな。」

そして、百目鬼は公園を去って行った。

ツ「……………」

海「……………」

純「……………」

何か気まずい雰囲気になる三人。

純「あ、そうだ！」

先に純が切り出す。

純「二人共、僕にスケッチさせてよ。いま此処にスケッチブックがあるからさ。」

そして、その後ツナと海人はそれぞれ純に絵を描いて貰い、その絵プレゼントされたという……。

(絵はものすごく上手かったそうだな。)

第九話「それが僕だから。」GW。休日の公園で。（後書き）

こんばんは、アケザキです。

お久しぶりです。

長らくお待たせして申し訳ありません。

いやあ、四月って何であんなに忙しいんですね。

長いブランクが開いたせいか、文章がグダグダになってしまいました……。

特に百目鬼が動かさずらくて……。

とりあえず、なんとかリハビリしていきますのでよろしく願います。
たします。

それと、お気に入り登録をされた方、本当にありがとうございます
！！

これからも頑張っていくのでよろしく願い申しあげます！

それでは。

第十話「マジヤベーンだって!!」GW。朝の暴拳と押し寿司と。(前書き)

ながらくお待たせ致しました。

今回は、虹ヶ丘学園の教師達が出てきます！

「アレ？コイツ教師じゃ無いよね？」ってキャラも出てきます。
多分、知っている人は知っている……」

それでもOK！て方はどうぞ！！

第十話「マジヤベーンだって!」GW。朝の暴拳と押し寿司と。

虹ヶ丘の中にある、とある一軒の建物。

建物の名前は『ガブ城ヶ崎』。ごくごく普通のありふれた三階建てのアパートだ。

現在、ここには『虹ヶ丘学園』の生徒や一部の先生方が住んでいる。

そして只今の時刻は、朝の6時半……。

ピンポーン

ある一室の玄関から、インターホンのベルの音が鳴る。

……しかし、この部屋の主は現れない。

ピンポン

再び鳴るベルの音。

……しかし、やっぱりこの部屋の主は現れず。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

そこには……

「ボンジュール 黒鋼先生（笑）」

黒鋼の現教え子、サファイア・トゥールヴィオンがそこに立っていた。

§

§

§

「まったく……朝っぱらから五月蠅い事すんなよおめえ。おかげで寝不足になんたろーが」

現在、居間では黒鋼本人とサファイアがちゃぶ台を挟み向かい合っていた。

ちなみにサファイアの頭には、たんこぶができている（理由は勿論、朝早い内からインターホン連打という名の暴拳を行い、げんこつを喰らったのだ）。

「いや、だってどこかへ行きたい気分だったしい……」

サファイアがむすーっとしながら答える。

「どこかへ行きたい気分だったからじゃねえ！！何で連打すんだよ！！つーか何で俺ん家知ってたんだ！？そして何でこんな朝早え時間に来た！！？」

バンツ！！と大きな音を出してちゃぶ台の上を叩く黒鋼。

「だって二回もインターホン押したけど出なかったしー。俺、今朝三時に目え完全に覚めちゃって、とりあえず起きて日課のジョギング（二時間）をして、暇だったから友人が無理矢理置いてった『リリースオートキャンプ』（二十分で飽きた）をやって、シャワー浴びて、身支度して、どこかへLet's GO！しちゃった結果がこれなの」

「……そんだけの理由で俺ん家に来たのか！？」

サファイアが来た理由がものすごくとんでもないものだったので、呆れた黒鋼。

「まあ、それだけじゃないんだけどね。ここ来た理由」

「いや、まだあんのかよ！？」

「それより朝飯食べようぜ。ほら、知り合いから先生の大好きな押し寿司貰って来たから」

「お前は酔っ払いの中年親父か！！」

……もはや完全にサファイアのペースに乗せられている。

「もー。『黒さま』は怒りんぼだなく。せっかく自分が担任受け持つてるクラスの生徒が遊びに来てくれたんだからさ、もう少し嬉しそうな顔しよーよ〜」

……そこに、キッチンからお茶を持って来て現れたのは、黒鋼と同じ虹ヶ丘学園教師のファイ・D・フロアライト（右隣りに住）。教科担当は理科（主に化学）である。

（ちなみに黒鋼によく色々な『あだ名』をつけて呼んでいるため、つけた『あだ名』によっては激怒した黒鋼に追いかけられたりしている。）

「あ、ファイ先生。わざわざありがとうございます」

「いいんだよー。せっかくGWの朝から来てくれたのに、これくらいはしない」と」

そんな会話をしながら、ファイからお茶を受け取っているサファイ

ア。

「あの、ファイ先生。もしよかったら押し寿司持って来たんで、ここで一緒に食べませんか？」

「うーん……気持ちは嬉しいんだけどな。俺、生魚苦手なんだよ」

「……って何人ん家で呑気にそんな会話してんだ！！自分の所でしろよ！！」

「バンツ！！と今度は両手でちゃぶ台の上を叩く黒鋼。

「まあまあ、いーじゃないっすか黒鋼センセ！むしろ先生ん家入ったこと全然無かったし！！俺は先生ん家で週間雑誌読めて大満足ですよ！！」

「つーかお前、未だに『マガジン』読んでんのかよ。こーいのは普通『ジャンプ』が当たり前だろ」

「オメエ等もオメエ等で何くつろいでんだ！！」

キッチンのテーブルで呑気にくつろいでいる二人　社会科兼外国語科担当教師のヴァッシュ・ザ・スタンピード（左隣りに住）と、皆さんご存知銀八先生だ。

「てか何で銀八がここに居んだよ!? テメエ確か家別のトコだろ!」

「あー、ファイから連絡貰った」

……こんのへにゃへにゃ化学教師!?!と心の中で叫ぶ黒鋼。

「あ、ちなみに言っとくけど、黒鋼先生の部屋教えてくれたのファイ先生だよ」

サファイアが言った瞬間、ブチィッ!と何かがキレた音がした。

「テメエだったのか!?!コイツに俺の部屋教えたヤツは!?!」

ガバァッ!と、おもいきりファイの胸倉を掴んで言う黒鋼。

「ちょっとちょっと黒鋼先生!?!危ないですって!?!落ち着いてくださいって!?!」

ヴァッシュが何とか止めに入ろうとするが……

「止めんな！元はといえばこの化学教師がコイツに教えたせいでこゝなつたんだろ！」

……と、殺気をおもいつきり籠めた怒りをぶちまける。

「だって教えて欲しいって頼まれたから〜」

「だからって教えてどーする！！個人情報漏洩で訴えんぞ！！」

……もう、怒りで我を忘れる一歩手前である。

その時……

ぐぐぐ……。

「同時に腹の虫が鳴いた。」

「……そういえば、まだ朝ごはん食べて無かったね」

「……そうだな」

「そういえば、俺も……」

「俺も朝食わないで来たからなあ……」

「……腹減ったであります。先生」

「」「」……「」「」

§ § §

「んっ！んっめえっ！！」

「っひょっマジウメエ！！」

「さっすが元料理人なわけあるな」

「……………（もぐもぐ）」

「おいしっっっ」

……あの後、とりあえずみんなで朝ごはんを食べることにした。

「おかわりまだありますから、沢山食べてくださいね」

そう言ったのは、ファイの双子の弟、ユウイ。元料理人であり、去年まで虹ヶ丘学園の特別調理講師として働いていた。

今年は教員免許を取得し、家庭科の先生として学園に勤めている。

ちなみに、兄のファイと同じ部屋に住んでいる。

「しっかしよ、元料理人が同居人ってすげーよな」

しかも弟だしよ。と銀八が関心して言う。

「そんな事ないよ、銀八先生。ファイには今まで色々と家の事とか任せつきりだったときもあったから」

これくらいはしないと。とユウイは銀八に返す。

……こうして、朝食を穏やかに食べた一同だった。

§ § §

「で、トウルヴィオン。お前いつまで俺ん家に居る気だ？」

朝食終了後、黒鋼はサファイアに聞く。

「あ、その事何だけどさー……先生、ちょっと匿ってくんね？」

「……は？匿うっ？」

何で匿うという単語が出たのか、さっぱり理解出来ない黒鋼。

ピンポン

その時、インターホンが鳴った。

「あ、俺が出ますよ。……はいはい！どちら様……」

そう言って、ヴァッシュが応対に出る為、玄関のドアを開けた。

直後。

「……おっ……」

ヴァッシュが叫び声をだしながら尻餅をついた。

その玄関には

「すみませーん。ここに私の妹が来ていませんか？」

サファイアの姉、ラピス・トゥールヴィオンが笑顔を浮かべ、背中からは黒いオーラを出し、木刀を持って（突き出して）立っていた。

「げえっ！？もう来たのかよー！！」

サファイアは慌てて逃げようとするが……

「待てコラ。どういう事が説明しろ」

黒鋼が、ガツチリとサファイアの肩を掴む。

「いや、ちげえよ！！俺何にもやってねーもん！！あれは事故だったんだって……」

と、言いながら黒鋼の手を離そうと躍起になるサファイア。

「すみません黒鋼先生。ものすごいやんちゃな妹を、こちらに引き渡してもらえます？ちょっととした制裁を加えたいので」

対する姉は尻餅ラビスついたヴァッシュを避けながら、二人の所へ近づく。

「ねえねえ、君達二人の間に何があったのか説明してくれない？じやないと俺達、何が起こってるのかわからないから」

と、こちらはいかにもへにゃんとした笑顔でラピスに話しかけるファイ。

「実は昨日の事になるんですけど……私がこの間買ってきたばかりのCDをこの子がぶつ壊してくれやがったんですよ」

そう言いながらズンズンと黒鋼達に近づいていく。

「いや、だってそんなに大切なCDだったら普通あんなところに、しかも剥き出しで置いているねーちゃんが悪い!!」

「置いてないわよ。落としてしまったの。それをあんなって子は……」

「仕方ないだろ！俺がんな事気がつくわけねーし！」

……つまり、こういう事である。

ラピスは昨日、最近買ったCDを聞こうと準備していたところ、取り出した本体をうっかり床に落としてしまい、さらに部屋に入ってきたサファイアがそれを踏ん付けて壊してしまったのだった。

「……お前、そんなくだらない事でここに来たのかよ」

黒鋼は、もう怒る気力も無いほど呆れ果てていた。

「だってねーちゃんヤベーんだって！！“やられた事は億兆倍返しで殺り返す”のがモットーで、実際に街でやばそうなオツサン達に絡まれた時なんか逆に締め返したしさ！！昨日だってあのあと何とか必死に弁解したんだけどさ、『明日、覚悟しときなさい（黒笑）』とか言って部屋追い出したし！殺気マジパネエしよ！！」

サファイアの目からは、恐怖で震えて涙が出てきそうになっていた。

「……だから匿ってくれって言ってきたのか」

ハア……と溜息をつき、サファイアをラピスに引き渡した。

「ちょっと、嘘だろ黒鋼先生！？マジ助けて、助けて！！」

「悪いが、それはお前の責任だ。ちゃんと詫びとけ。俺にはどーする事も出来ねー」

黒鋼は、諦めるといふ顔でサファイアを見ていた。

「それじゃ先生方、お世話になりました。この御礼は必ず返しますので……」

と、ラピスはサファイアの腕をガッチリと片手でホールドしたままお辞儀をする。

……隣でサファイアが「いゝたいッ!!マジ放して!!ヤバいつて!!腕がもげる!!」と半泣きになっているのは気にせず。

「それでは、さようならー!!」

……そして、（逃げようと必死にもがいている）サファイアをズルズルと引っ張って帰っていった。

「……とんだお騒がせ姉妹だな……」

未だに床に尻餅をついたままのヴァッシュのつぶやきは、誰にも聞こえる事無く消えたのだった。

おまけ。

「……アレ？そつえば銀八先生は？」

ファイが気づいた様に言う。

「そつえば、朝食の後から見てないんですけど……」

ヴァッシュは立ち上がって、キョロキョロと見渡す。

ジャァー！

「あースッキリした……ってあれ？みんなどうした？つかサファは？」

「銀八……お前、トイレにいたのかよ」

朝食後から行方不明だった銀八は、居間の手前にあるトイレから、呑気に出てきたのだった。

第十話「マジヤベーなんだって!!」GW。朝の暴拳と押し寿司と。(後書き)

皆さんこんにちは。アケザキです!!

こちらの『虹ヶ丘』は随分ご無沙汰しておりました。

さて、今回の話は教師達を中心にキャラクターを登場させました。

……中でも、ヴァッシュ・ザ・スタンピードというキャラクターに
関しては、登場させるかさせないか、正直、迷いました。

このキャラクターは『TRIGUN』（読み方は、トライガン）と
いう、アニメにもなった漫画の主人公なのですが（確か去年辺りに
映画もやっていた）……多分知っている人は限られてしまうので、
どうしようかと悩みました……。

でも、この小説をきっかけに『TRIGUN』を知って、興味をも
っていただけならなと思っています。（ちなみにシリーズ物で、話
の内容も凄く面白いんですよ!）

そして、今回の話の補足をしておきます。

まずユウイは前半、隣で朝食を作っていました。そして、ラストはその片付けをするために戻っていきました。

そして、サファイアが残っていた押し寿司は、黒鋼と銀八とヴァツシユが昼食として美味しくいただきました。

……これくらいですね。

さて、次回は香苗ちゃんとアーウィン君の、ファミレス大騒動になる予定です！

後、もう一つの連載『Return〜再生する世界〜』もよろしく
お願いいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5988o/>

学園都市虹ヶ丘

2011年10月8日04時39分発行